創刊10周年記念特集号

東京白楊だより

第10号
62. 8. 1

白楊ケ丘同窓会東京支部

旧制　函館中学校
函館中部高等学校

《目次》

ご挨拶 池田和行……1
東京白楊だより第十号に寄せる 古谷泉……1
東京支部結成十周年に寄せて 笹島吉平……2
白楊ヶ丘同窓会東京支部大会10年のあゆみ……3
函館中学校・函館中部高校90年のあゆみ……4
歴代支部長に聞く……5
昭和61年度収支決算……7
昭和62年度親睦大会日程決まる……7
同期会活動状況のアンケート結果……8
支部だより……8
同窓生連帯意識とは不思議なものだ 冨原章……8
七年目を迎えて 工藤欣也……9
白楊ヶ丘同窓会宮城支部の結成 鍛治一郎……9
会員よりの投稿……10
われもまた鬼籍に入る日近し 浜田幸治……10
五十七年前の想い出 伏見滋史……10
函八会の奈良旅行記 岡崎弘……11
日米野球の思い出 成田安賢……12
ハナタは帰らない―無音のアッシュ考 河村泰平……13
ハコダテベンコ随想 本田幸兵衛……14
函中獅子の会 佐藤文三……14
桜の想い出 小泉龍彦……14
私の中部交遊抄 大建二郎……15
しばらく振りの函館 武田至正……16
冬の横津岳 五十嵐守正……17
夢現の間 山本興太郎……18
ファイルの中身 泉清美……19
函中三八会 菅原大作……19
同窓会に出席して 飯田明子……20
音楽を楽しむ 阿部博光……20
調査のつれづれに 北村知文……21
ばいの会 常陸千尋……21
会員の皆さんよりのお便り……22
はこだて賛歌……23
函館よりのトピックス……24
函館EXPO'88「青函博」……24
JUNO'S JAPAN'88「世界・食の祭典」……25
北海道立工業技術センター……25
北海道立函館美術館……26
函館ソフトウェア専門学院……26
母校だより・62年度卒業生の進路について 柴田隆一……27
編集後記……28

『ご挨拶』

東京支部長　池田和行

「東京白楊だより」第十号を会員の皆様へお届けできることは大変悦こばしいことでございます。

昨秋東京支部第十回大会の席上本号を記念号とすることをお約束いたしました。幸い吉田副支部長他編集担当の各位の尽力で従来にない企画が実りました。函中が中部高校と衣更えをして男子中学校から共学高等学校となってからも四十年近く経過しております。新制高校になって以来の卒業生が二万人強でしょうが、その一割近くが所謂在京同窓生ということになりましょう。大学、専門学校時代から社会人となりまた家庭人となって東京及び近県に居住しておられ、各界で活躍されておられても爾如の語らいの機を得られるのは竹馬の友であるといわれます。同期同級生が折を得て盃を交すことは会社の同僚や家庭内の交りとは違った楽しみであり、この輪のひろがりが東京支部の組織であります。支部再建以来十年の星霜をこの記念号に集約し得たことは初代斉藤支部長以来折々の幹事各位のご努力と紙上より厚く謝意を表するものであります。特に十年間連続して支部役員を務められている小畑文雄、小泉龍彦・福津達男・黒川陸郎・野村実各君に対し皆様とともに深甚の謝意を表したいものであります。

この一年には母校の校長も変られ、古谷新校長が昨秋の大会に出席され、又東北支部の改組大会には東京支部からも出席、祝意を表する等各支部大会に東京より役員が出向き各支部との交流にも意を尽してまいりました。

今年の秋の大会は別項のとおり十一月二十一日と決定いたしましたが、初めて土曜日の午后の集いといたしました。週日の夕と相場をきめこんでいた我々の常識を破ることとなりました。大会は小泉、黒川両役員コンビ一任時代から次の世代へバトンタッチを試みた結果家庭主婦の会員へも出席機会を拡げた訳ですが、大先輩各位にとられても片道でも明るい中にお出掛けいただけるわけで今まで以上の盛会が期待できましょう。

現在の理事には婦人代表も参画願い、文字どおり六十年に亘る同窓生全員参加の組織化へ支部体制も整えておりますが、〝白楊魂〟の掲額のもとで培われた健児たちが先後輩ともども単なる親睦をこえてお互いに励ましあえる人の輪がより大きく拡がれるよう今年も会員皆様のご健勝とご活躍を祈念してご挨拶といたします。

『東京白楊だより第十号に寄せる』

函館中部高等学校長　古谷泉

白楊ヶ丘同窓会東京支部発行の「東京白楊だより」が、ことし昭和六十二年は第十号を算えるに至ったことは、まことに喜ばしくお祝いを申し上げると共に、関係のみなさんの御熱意と御努力とに対し深く敬意を表する次第であります。

東京支部の方がたが、このような献身をされている事実は、広く同窓のみなさんを結びつけ一人ひとりに激励を与えるばかりでなく母校の発展に寄与するものが少なくないものと存じます。さらに、札幌、函館、宮城その他の支部の活動にも明るい展望をもたらすこ

とでありましょう。

みなさんの母校は、依然として名門校の伝統に生きつづけ、その歴史に輝きを与えております。今春の大学進学成績もその量と、とりわけ質において優れたものがあり、人口32万都市と衰弱した経済基盤とを背景としながらも全道五指をもって数えられる地歩を確保しているところです。

文化・スポーツ活動の面においても、高体連・高文連の各種目で、道南地区の代表として全道、全国に優秀な成績を示しておりますことは御承知の通りでございます。

日頃、同窓のみなさんに何かと御後援をいただいておりますが、ポプラ魂を具現化する函中生の人生は止むことなく、変ることなく続いているのです。

さて、あと八年を経れば百年を迎える函中が、つまり、われわれ同窓生が北海道社会や日本社会に対していかに在り何を為さなければならないかは、緊急の課題として受けとめているところでございまして、昨秋の東京支部総会での御挨拶でも申し上げた通りであります。私は、ポプラが丘の伝統の中に埋蔵されている恒常不変の価値基準を、日常の教育活動の過程において生徒と共に発掘したいものと念願しておりますが同時に、同窓生の間に蓄えられている精神と知性の力を郷土と人間の新しい開発に注いでいただきたいと希望しているものであります。

先日、東京在住の56期の諸君との会合で、先輩によるホームスティ構想が話し合われました。方法論はさておいて、ポプラが丘の風土にはたらく親和力が個人に対し互いに結びつけ、単なる知己友人の関係に終らせないものがあることを感じ、まことに嬉しく思ったのであります。

子供達が去った空部屋に、進学して東京に出てきた後輩の若者を迎えるということは現実には数多くない事例でありましょうが、もし出来れば、アイデンテティを望み求めながら容易には得られないため彷徨う若者を救う慰みも与えられるのではないでしょうか。

また、私がお願いしたいことは、同窓生のみなさんに関する情報を、同期会誌や個人史あるいは職業社会でのニュースなどいろいろな資料の形で学校に送付して下さることです。その受け皿として百年史資料整備委員会を設置してお待ちしているところです。高島小太郎先生も御自身が探索された資料を携えておいでになり、校長室にしつらえた資料棚に整理されております。それは函中に生きる人々のお姿であると私は感動している次第です。

百周年は、ポプラが丘に、二十一世紀を担う新しい学校として母校が形を改めて、迎えることになりましょう。その日のための一歩一歩を私共は築いて参りたいと念願しております。

『東京支部結成十周年に寄せて』

白楊ヶ会同窓会会長　笹島吉平

白楊ヶ丘同窓会東京支部結成十周年誠にお目出度う御座居ます。第一回支部設立総会をマツヤサロンで盛会裡に開催してから、もう十年もたったのかと今更ながら月日のたつのが早いものかと一しお感無量の思いが致します。

顧りみますと、戦前から東京では「在京函中会」と称する親睦団体があり、戦後第一回として昭和二十六年に中央大学講堂に於いて盛大に開催され、永井一郎氏（大正八年卒）が世話人となり、その後阿部良平氏（大正六年卒）、和田貞一氏（大正十一年卒）などの大先輩によって受け継がれ、近年では昭和四十七年マツヤサロンで三百数十名、昭和四十九年ニュートーキョーで二百数十名の会員が参加して開催されました。前会長故美馬孝夫氏（大正十二年卒）が年々先細りになることを心配し、新しく若い会員の人達を加入されることを希望され、この「在京函中会」を発展的に解消し、新たに函館中部高校卒業生を加え、正式に「白楊ヶ丘同窓会東京支部」として発足し、その設立総会が昭和五十二年十一月二十二日（火）に開催され初代会長に斉藤鎮雄氏（大正八年卒）が就任され、東京支部会員の名簿の発刊をし、爾来故北川有光氏（大正十三年卒）、村上敏夫氏（昭和八年卒）、池田和行氏（昭和十八年卒）によって脈々と受け継がれ今日に至っていることは皆様良く御承知のことと存じます。歴代支部長さんの並々ならぬ御努力により現在首都圏三千名を超える会員を有し、母校教育精神の発揚と、同窓会員相互の連帯のきずなが一層強化され、支部最大の規模になりましたことを心からお祝い申し上げます。また去る母校創立九十周年記念事業に対しましても絶大なる力量を発揮し、母校発展の大きな原動力になったことは、まだ記憶に新しいことであります。

こゝに満十周年を迎え益々発展することを祈ると同時に、母校創立百年（昭和七十年）にむけて会員一同固く結ばれた絆により白楊魂を掲げて一歩一歩前進しようではありませんか。

白楊ヶ丘同窓会
東京支部大会
10年のあゆみ

第一回（支部設立大会）
昭和52年11月22日（火）
千代田区平河町全共連ビル
「マツヤサロン」
出席者　三六八名

第二回
昭和53年11月22日（水）
千代田区平河町全共連ビル
「マツヤサロン」
出席者　二五四名

第三回
昭和54年10月1日（月）
千代田区平河町全共連ビル
「マツヤサロン」
出席者　二二三名

第四回
昭和55年10月30日（木）
港区虎ノ門「ホテル・オークラ」
出席者　二六五名

第五回
昭和56年10月23日（金）
港区虎ノ門「ホテル・オークラ」
出席者　二〇一名

第六回
昭和57年10月15日（金）
港区南青山乃木坂「健保会館」
出席者　二二二名

第七回
昭和58年10月21日（金）
港区南青山乃木坂「健保会館」
出席者　一八八名

第八回
昭和59年10月19日（金）
千代田区平河町全共連ビル
「マツヤサロン」
出席者　一五二名

第九回
昭和60年10月24日（木）
港区高輪「ホテル高輪」
出席者　二二八名

第十回（創立10周年記念大会）
昭和61年11月21日（金）
港区高輪「ホテル高輪」
出席者　二〇六名

函館中学校
函館中部高校
90年のあゆみ

●明治27年
札幌区と函館区にそれぞれ公立尋常中学校設置決定。函館では当時会所町60番地付近に、7月より分校舎、寄宿舎の新築工事着工、12月に工事完了。

●明治28年4月1日
告示第33号により函館尋常中学校開校。中学校と商業専修科の併設で、中学科2年修了後中学本科と商業専修科に分かれる。修業年限はともに5年。この年の入学者は中学科1・2年級合計149名。

●明治32年3月30日
中学科第1回卒業式挙行。卒業者7名。

●明治32年4月1日
中学校令改正、函館中学校と改称。

●明治32年6月30日
函館商業学校の設立により、商業専修科を廃止。

●明治34年6月15日
北海道庁立函館中学校と改称。

●明治39年1月7日
校地狭隘のため、前開拓使函館支庁長時任為基氏より私有地1万坪寄付、現在地に校舎を新築移転。（当時の地番、字湯の川通畑17番地）

●明治39年9月1日
寄宿舎4棟落成し、生徒を移す。

●大正3年11月8日
開校20周年記念式挙行。校旗・校歌を制定。

●大正13年7月20日
父兄会設立総会開催。父兄会発足。

●大正15年7月31日
父兄会寄付による理科実験室竣工。

●昭和4年3月31日
寄宿舎廃止。

●昭和6年5月1日
開校記念日を制定。（開校日4月1日より1ヵ月遅らせて行う）。

●昭和10年6月1日
創立40周年記念式挙行。記念事業として、温室および工作作業室を新築。

●昭和21年5月22日
創立50周年記念式及び慰霊祭を元町本願寺別院で行う。

●昭和22年4月1日
新学制による新制中学校発足、それによりこの年旧制中学校の新入生はなく、また2・3年の在学生は併設中学校生徒となる。

●昭和23年3月31日
旧制中学校閉幕（本校の旧制卒業生5、806名）。

●昭和23年4月1日
新学制により北海道立函館高等学校として発足。

●昭和25年4月1日
市内公立普通科高校の統廃合が行われ、本校は北海道函館中部高等学校として再発足。（男女共学生実施、1学年7学級編成）。

●昭和27年11月14日
校舎の改築工事着工。（第1期工事地鎮祭）（28・5・27完成）。

●昭和28年9月10日
第二期工事着工。（29・5・10完成）。

●昭和29年11月25日
第三期工事着工。（30・8・20完成）。

●昭和31年1月17日
第四期工事着工。（31・8・15完成）。

●昭和31年10月7日
創立60周年記念ならびに校舎改築落成式挙行。

●昭和33年9月26日
グランド整備工事竣工。

●昭和37年6月30日
学級増による校舎増築工事着工。（第一期工事 37・10・31完成）。

●昭和37年11月7日
第二期工事着工。（38・8・20完成）。

●昭和38年4月1日
この年より生徒数増加にともなう応急学級増が行われる。（2～3学級）（この年新入学生466名）。

●昭和39年11月15日
屋外プール新設工事竣工。

●昭和39年11月30日
学級増による校舎増築工事竣工。

●昭和40年4月8日
この年の新入生529名

●昭和40年9月4日
創立70周年記念ならびに校舎増築落成式挙行。協賛事業として「70年史」の発行、および屋上に天体ドームを新設。プール更衣室完成。

●昭和41年4月1日
この年より大学区制となる。

●昭和45年4月1日
この年より応急学級増が解消し、1学年8学級編成となる。

●昭和50年10月5日
創立80周年記念式挙行。
白楊時報縮刷版を発刊。

●昭和51年12月7日
校舎増改築工事（視聴覚教室等）竣工。

●昭和52年3月10日
「白楊魂」（80周年記念誌）発行。

●昭和52年11月30日
格技場竣工。

●昭和53年4月1日
1学年9学級編成となる。

●昭和54年3月24日
体育館改修工事竣工。

●昭和59年3月31日
屋外プール上屋工事竣工、プール更衣室改築。

●昭和59年7月14日
白楊ヶ丘同窓会館竣工、落成式挙行。

●昭和60年10月12日
創立90周年記念式典・祝賀会挙行。

『歴代支部長に聞く』

白楊ヶ丘同窓会東京支部が誕生して、昨年ちょうど十周年を迎えましたが、その間支部会員も三千名近くに達し、年ごとに大きな広がりを見せてきております。

十周年を機会に、お二人の歴代支部長に、創立のきっかけ、ご苦労話やこれからの若い人たちへのアドバイスといったものをお聞きしました。（聞き手は副支部長吉田精吾）。

●歴代支部長に聞く①

初代支部長 **斉藤鎮雄 氏**

はじめに、初代支部長として昭和52年から2年間ご活躍され、現在顧問の斉藤鎮雄氏を練馬区下石神井のご自宅をお訪ねした。

―― 早速ですが、昭和52年に東京支部が創立された訳ですが、それ以前からも皆さんお集りになっておられたんですか。

斉藤 それは、あんまりなかったようですね。部分的には、同年代の人たちが七～八人ぐらいのグループとしては函中有志同窓会といったような形で集まっていましたが、組織だったものはなかったようですね。

―― そうした中で支部をつくるきっかけになったのは、どんないきさつからですか。

斉藤 実を言うと、私は引っ張り出された方なんですよ。はじめからこの会に尽力されたのは大先輩の阿部良平さん、和田貞一さんとか二代目支部長で昨年なくなった北川有光さん、それに酒井さん、小畑さん、宮本さんなどの方たちが中心になって、何とか東京函中会といった一つのまとまった会を作ろうと相談していたようですね。その中に私のところに何度となく皆さんが押しかけてきて、どうしても私にやってくれと説得され、引き受けた次第です。

当初は旧制だけという意見と新制も入れようという意見とがありましたが、旧制だけでは先細りになっていきますよね。新制も入れば、歴史もず～っと続いていくということで新旧全ての会にしよう、名前も母校の象徴である「白楊（ポプラ）ヶ丘同窓会」に決まったわけです。

―― 何事も最初はご苦労が多かったと思うんですが……。

斉藤 やはり人を集めることでしたね。それぞれが東京に友人を持っているが、それを全体としてどの位の数にまとめ、大会を開いて果たして何人集まるか、ということにとくに幹事の皆さんが一番苦労したようですね。

それだけに第一回に三六〇人も集まり、大変盛り上ったことは非常に嬉しかったし、本当に皆さんのおかげです。

―― 在任中でとくに思い出に残ったことは……。

斉藤 同窓会名簿を発行できたことでしょうね。卒業生の氏名をとりまとめられるかが一番気がかりでした。それで私は在任中に会員名簿を発行し、これによって会の基礎づくりができれば、だんだん広がっていくだろうと思って幹事の皆さんにお願いしたのです。幸いにして皆さんのお力添えで実現できて本当によかった。

―― 大先輩として、これからの同窓会活動に期待したいことは……。

斉藤 最近同窓会の出席者が横ばい、ということのようですが、やっぱり同期会に比べると知ってる人も少ないし、遠慮しておこうという気持が出てくるんでしょうね。しかし、同窓会と同期会が両方相まってはじめて本当の発展につながるのです。せっかく枝葉がすくすく伸びても、肝心の幹の方が枯れてしまったら、木全体がダメになってしまう。ですから、どうか幹を絶対枯らさないよう、知恵をしぼって皆が楽しく集まれる同窓会にしてほしいものです。

―― これからの若い人へアドバイスをひとことお願いします。

斉藤 やはり若い人にはこの同窓会にどんどん入ってもらって先輩とのつながりをもってほしいですね。諸先輩の指導を幅広く受け、交友を深めることによって、自分自身の生活や仕事を進める上でも大いに役立つと思います。そのためにも学校との連携をもっと深め、卒業生に対して学校側でももっと積極的に呼びかけてほしいですね。

こうしたことを連続していけば、歴史の積み重ねがきっと生きてくるに違いないし、連携によって、この会が永続していくものと信じています。

―― 先輩は八十五才とは見えないくらい大変お元気でおいでですが、最後に健康の秘訣といったようなものがあれば教えてくださいませんか。

斉藤 実は数年前に胃を⅔も切って、15キロも減ったんですが体調は大変いいんです。特別やっている訳ではないんですけど、毎週三回会社に行ってるんです。そのうち一回は主治医に体を診てもらい、一日はロータリーに出席、そしてもう一日は休日明けの模様変えなどを見て新しい変化に触れています。

あと、毎晩風呂上がりに必ず真向法を15分ほどやっています。もう23年続けていることになるんですが、おかげ

で体調はとってもいいですね。

――　今日はお忙しいところ大変貴重なお話をお聞かせいただきありがとうございました。これからも益々お元気で私ども後輩のご指導をよろしくおねがいいたします。

さいとうしずお氏略歴―明治35年3月生まれ、大正8年函中（21期）卒、昭和3年東大（経）卒、同年三越本店入社、その後銀座・札幌支店長を歴任、昭和21年乞われて松屋入社、取締役会長を歴任、現在は相談役。

●歴代支部長に聞く②

第三代支部長　村上敏夫氏

次に昭和57年から60年まで三代目支部長としてご活躍いただいた村上敏夫氏よりお話をお聞きしました。

――　斉藤初代支部長からは、創立のいきさつとかご苦労話をお聞きしたんですが、村上さんはどんな点にとくに力を入れたのでしょうか。

村　上　一つは、同窓会が個人プレイでなく、組織が組織として機能しなければならないという考え方のもとに機構職制を改めたことです。同時に全員参加する同窓会づくりが望ましい訳ですが、そのためには財政的な基盤の強化が大事です。その基本が会員拡大であり、とくに女性を含む新制卒業生の入会を呼びかけました。女性の口コミによるPR効果はとても大きいと思いますね。

第二は、評議員制度を新設し、これを決議機関にしたことです。それ迄の総会という全員参加の場では運営が遅くなって何もできない。もっと仕事をしやすくするためには各期幹事を評議員とし、ここで議事をはかっていき、総会はそれらの報告と会員の親睦、交流を深める場にしたことです。

そして、会費も千円から二千円にしたんですが、納入者が全体の30％しかいない中で、二千人以上もの会員すべてを賄っていくのは実に大変なことです。何としても納入率を50％くらいまで高めていくことがこれからの課題でしょうね。そのためにも各期の評議員にはもっと頑張ってほしいものですね。

――　これからの支部に期待するもの、あるいは課題といったものについて……。

村　上　10年とか15年くらいの計画で何とか支部自身の建物を持ち、事務室はもとより会議できるような部屋をぜひともほしいですね。大口寄付に頼るのも一つの方法でしょうけど、やはり会員をふやし、会費納入率を高め、毎月もっと積立てできるような財源づくりがぜひとも必要です。

もう一つは、定時制（夜間部）の皆さんにも呼びかけて、メンバーに加わってもらうことじゃないかなと思いますね。現に東京でも別に集まってるようだけど、今のままでは誰も声をかけないので参加できないでいます。やはりこれからは一緒にやっていくべきではないかな。人数も結構大勢いるようですよ。

――　会員拡大が大事なことはよく分かりました。しかし、よく「同期会は楽しいから出席するが、同窓会は出てもあまり面白くないからね」という声を聞くんですが、同窓会を魅力あるためにはどうしたらよいとお考えですか。

村　上　やはり役員の皆さんが一致協力して色々な情報を流してあげることですね。限られた人だけがやるのではなく、できるだけ多くの人が一緒になって実行し、沢山の人の言葉を通じて方々に伝わっていくということが大切ですね。

同窓会も結局は学校後援会みたいなものです。だからこそ皆が奉仕の精神で親睦と交流をはかっていかねばならない。そのためには毎年一回の親睦大会だけでなく、時にはゴルフなんかの趣味の集まりでもよし、あるいは講演会などもその一役を買うことができるのではないかと思いますね。我々の周囲には多くの著名人がいるのだから、そういう方たちに講師をおねがいするのも一法と思う。

――　こうした魅力ある同窓会を築く若い人たちへ何か注文するとすればどんなことですか。

村　上　一言でいうと、もっと積極的に参加してほしい、ということですね。そして若さの特権でもっと思い切り、何でもチャレンジしてほしいと期待していますね。それとやはり奉仕の精神が大事だということです。

――　最後に今一番楽しんでおられることは……。

村　上　とくにはないんです。庭の手入れとか散歩とかくらいで……あと長唄を続けています。毎週一回先生のところで稽古しているほか仲間と如水会館の一室を借りて、やっています。もう三十二年になるんだけど、銀行時代に取引先のアプローチ中にそこの社長から「長唄の稽古につき合うなら取引しよう」と誘われたのがキッカケで、それ以来ずーっと続けているんですよ。

――　本日はどうも色々ありがとうございました。

むらかみとしお氏略歴―大正4年10月生まれ、71才。昭和8年函中卒、昭和14年東京商大卒、同年三菱銀行入行、経営相談所長を経て、昭和45年京王帝都監査就任、昭和60年退任。

昭和61年度　収支決算

（61. 4. 1から62. 3. 31まで）

（62. 3. 31現在）

- 収入決算額　3,740,454円
- 支出決算額　2,450,170円
- 収支差引残高　1,290,284円

（内　訳）

定期預金	900,000円
普通預金	370,168円
現金	20,116円

○61年度決算

- 年会費収入は前年比14,000円の増加となり、年々増えております。皆様のご協力に深く感謝いたします。
- 本年度は、決算剰余金がはじめて 100万円を超え、同窓会の財政も徐々に充実してまいりました。引続き会費納入についてご協力をお願いいたします。

収入		支出	
科目	金額	科目	金額
	円		円
会費収入	1,454,000	**運営費**	**579,422**
寄付金収入	80,000	消耗品費	6,000
利息収入	33,167	印刷費	34,190
大会費収入	1,323,000	通信運搬費	16,720
名簿等頒布収入	21,000	会合会議費	34,262
雑収入	2,300	理事会費	38,202
小計	**2,913,467**	評議員会費	46,388
前年度繰越金	**826,987**	本部派遣費	237,610
		会費払込料負担費	33,050
		大会準備費	133,000
		事業費	**1,717,973**
		会報印刷費	93,000
		会報送料	193,368
		会報諸費	37,000
		大会費	1,055,900
		大会諸費	338,705
		雑支出	**152,775**
		小計	**2,450,170**
		決算剰余金	**1,290,284**
合計	**3,740,454**	**合計**	**3,740,454**

本年度は収入小計が支出小計を 463,297円上回ったため、積立金への積立ては460,000円とし、830,284円を次年度へ繰越すこととします。

昭和62年度　親睦大会日程決まる!!

昨年10周年記念大会を盛況裡に終え、20年目のステップとなる本年は、若い幹事の皆さんの意見をとり入れ、はじめて土曜日開催にいたしました。
新しい企画も計画中です。函館からも懐かしい方々がお見えになります。
どうぞお誘い合わせのうえ、奮ってご参加ください。

●と　き　**昭和62年11月21日(土)午後3時30分より**

●ところ　**「マツヤサロン」**

千代田区平河町2－7－9　全共連ビル6階　電話 03（265）3301

地下鉄・赤坂見付（銀座線・丸の内線）下車　徒歩8分
地下鉄・永田町（有楽町線）下車　徒歩2分

●会　費　**（男性）7,000円　（女性）6,000円**

※なお、くわしいご通知及びご出欠のご回答は、追ってご案内をいたします。

『同期会活動状況のアンケート結果』

同期会各期幹事である評議員の皆さんにお願いして同期会の活動状況についてアンケートをお願いいたし、そのうち31名の方から回答をいただきました。新制・旧制ちょうど半々ずつでしたが、これをそれぞれに分けて、その結果についてとりまとめてみました。共通点・相違点それぞれ興味ある結果となりましたが、今後の同期会やこの東京支部活動のうえでいささかでもご参考になれば幸いです。ただ回答率が57％と漸く半数を超えた程度にとどまったことはいささか残念であり、今後の一段のご協力、ご支援をよろしくお願いします。

1、同期会は毎年行っていますか。

旧制では毎年、時々やっているというのが半々であるのに対し、新制では毎年やっているか（63％）殆んどやっていないか（31％）の何れかという面白い結果となりました。

2、1回当りの出席者は何人くらいですか。

旧制では、10人未満27％、20人未満13％、30人未満60％となっているのに対し、新制では10人未満、20人未満各13％、30人未満25％、50人未満37％とバラツキが多いうえ、50人以上という盛会の期も2グループ（13％）あったのは驚きでした。

3、出席者の男女比率はどの位ですか。

旧制は男性100％は当然として、新制では69％が半々ないし¾が男性と婦人の参加率も結構高く、半分以上が女性という期も1グループありました。

4、当番幹事は決まっていますか。

旧制では⅔が特定の人となっており、残りはその都度決めることにしております。新制ではちょうど半々の答となっており、新制の方が流動的のようです。

5、会費はどの位ですか。

最も多かったのが旧制では7～9千円（47％）次いで5～6千円（33％）1万円以上（20％）という分布であるのに対し、新制では1万円以上は1件もなく、7～9千円か5～6千円がちょうど半々で、5千円未満の安上がり組も1件ありました。

6、会場は主にどんなところを使っていますか。

旧制では料理屋が60％と圧倒的に多く、次いでホテルが20％ですが、会社の保養所などその他も20％と多岐にわたっています。

一方新制ではホテル（44％）料理屋（28％）が主力ですが、バー、スナック、公共施設なども散見されました。

7、会場はいつも同じところですか。

旧制では、その都度選ぶ（60％）が、同じところ（40％）をやや上回っている程度で、比較的定例会場を利用しているのに対し、新制では、その都度選ぶが88％と圧倒的に多く、大変興味ある結果となりました。

8、地元函館との合同開催がありますか、その場合の頻度は？

旧制では⅔があると答え、そのうち5年に1回程度が44％と最も多く、次いで毎年が33％、残りが2～3年毎と10年に1回程度となっております。

新制では、開催したことがあるのとないのが丁度半々です。このうち、5年に1回が38％と一番多いほかは、毎年、2～3年毎、10年に1回あるいは卒業以来1回とかなりまちまちです。

9、函館以外で1泊以上の同期会旅行をしたことがありますか。

旧制では⅔があり、行先は¾が温泉のあるところと、よく出かけております。

これに対し、新制では全体でも1期しかなく（温泉）、旧制と好対照を示しております。

10、同期会の会報を発行していますか。

旧制では⅓が毎年または不定期だが発行していると活動ぶりがうかがえますが、新制では僅か1クラスが準備中というほかは何れも発行していないという結果でした。

支部だより

『同窓生連帯意識とは不思議なものだ』

函館支部幹事長
冨原　章（44期卒）

それが商売上の取引であったり、お役所への折衝であったり、日常生活の上での交渉であったりしても、論議の末一時休戦となり、世間話が郷里の話になったりして、それがたまたま出身校のことに話が及び、「コレハ、コレハ、函中の先輩でありましたか」「うむ、おマエは後輩であったか」ということから、立場も話も急転回して好調に向かうという経験は、私にも幾度かあるし、同窓生諸氏にもお持ち合わせがあろう。

これが同期生となると、その絆はますます固いものになる。その集会では、たとえ高名の政治家、学界の権威、著名の事業家等々、勿論一介の「平民」であろうと、たちまち十年前の悪童にたちかえり「オイ、おめえ……」ですむ。それは旧制函中生においてなお顕著で、何しろ十二、三のコドモのときから、毛の生え揃うまでの五年間（事情により六、七年間）も、白楊ヶ丘の学窓で共に過したという仲間意識がある、のである。

この同窓生という仲間意識とは不思議なものだ。この連帯意識は、一体何によって来たるものであろう。

今年の地方選で、地元の函館で、ある若い同窓生が新人として市議に立候補した。彼にはこれという組織も地盤も金もない。世評も冷ややかだった。しかし、彼は同期の間では信望があっかった。彼の同期生は燃えに燃え、馴れぬ手でポスターを貼り、選対を構成し、選挙カーにうち乗り、必死の運動を展開してついに彼を市議に当選させてしまった。

もしも、かれら同期生の献身的な奉仕がなかったなら、更にかれらの先輩後輩をもまきこむ情熱がなかったなら、彼の当選は全くなかったといってよい。

重ねて思う。かれらをしてこれまでに励起させた同窓生連帯意識とは一体何か。ふむ、これをネタにして、肉親の連帯意識に始まり、同じカマの飯を喰った仲間の会、同窓会、同郷会、同祖国会、はては宇宙的な規模で同地球人の会、の連帯意識に至る壮大な解析に発展させることができるかも知れぬ。と、最近とみに目減りの進んだ脳細胞を駆使してみたが、私のソフトは「同窓生連帯意識とは不思議なものだ」という反応に終った。

東京支部の会員数は三千名になんとすると聞く。ご同慶の至りに堪えぬが、この三千名の優秀な頭脳が地元から離れたという現実も考えなければならぬ。

とまれ創部十周年を遙かにお祝いします。

『七年目を迎えて』

札幌支部　支部常任幹事
工藤欣也（41期卒）

札幌支部の発足は昭和五十六年三月だからことしで満六年、六月十九日の総会は第七回目である。

創立総会の出席者は約三百名、会場に溢れる会員に流石は函中と胸を張った。それが年々出席者が減少、二百名を割り、百五十名を割った。このへんで何とかしなくてはというのが、役員一同のいつわりない心境である。東京支部の「函館物産大即売会」や「市役所提供抽選会」の企画は、その意味で大変参考になった。

同窓会の集まりのほかに、同期のつどいというのがあって、各期ともなかなか盛んである。同窓会はつまらないという声をよくきくが、それは相対的に同期のつどいのほうが楽しい、ということの意味でもある。同期は顔を合わしているだけでも楽しい。支部総会では同期を同じテーブルに指定するよう、前日ぎりぎりまで会場側と連絡をとる。

同期が何人か集まると、終わった後二次会に流れる。それが楽しみで出席しているという人もいる。だから開会時間が多少おくれても、終了は必ず午後八時を守ることにしている。会場の三越は札幌のど真ん中、地下鉄大通駅の真上で交通至便である。二次会に流れるのにもつごうがよい。

函館からは笹島同窓会長と柴田先生が皆勤である。歴代校長先生ももちろん皆勤である。東京支部をはじめ、函館、日胆、小樽各支部からも御出席いただいて会を盛り上げて下さるのはありがたい。

支部長は初代が佐藤祐司氏（38期）で、現支部長は二代目三浦祐晶氏（41期）である。元北大病院長・医学部長、現在はロータリー・クラブのガバナーで御多忙を極めている。支部の財政をもう少し豊かなものに、とおっしゃって下さっている。

ピアノの伴奏に合わせて校歌と同窓会歌をうたって散会するころは、函中に学んだ同士の温いものが胸に通いあい、また来年もとことばを交わし、夜の街に散って行く。

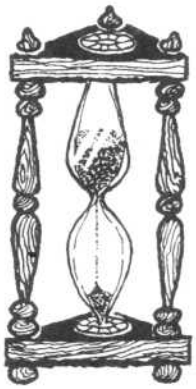
『白楊ヶ丘同窓会宮城支部の結成』

宮城支部長　鍛治一郎

当支部は大正時代から函中会宮城支部として東仙学生を中心に細々ながら続けて参りましたが、戦後母校も男女共学の高校となり、支部組織の改変の必要に迫られ、種々の構想に迷い乍ら、数年を過しました。たまたま母校九十周年の記念事業に刺戟され、ようやく六十一年五月世話人会の準備により同年九月六日函中会函館中部高校同窓会合同しての白楊ヶ丘同窓会宮城支部の結成を見ることになりました。当日は貴支部長殿の御来臨を賜り感謝に堪えません。現在百五十名程度の名簿でありますが、近年卒業の同窓生を加え、名簿の整理を行い、新しく再出発できることになり、本年六月二十日新総会を開催しました。

今後は一層の御督励と御指導をいただき貴部の驥尾について発展を期する覚悟であります。

末尾乍ら貴部の一段の御発展を祈念いたします。



『われもまた鬼籍に入る日近し』

浜田幸治（昭3年卒）

五月二十一日だったと思うが、畏友小畑君から「東京白楊だより」が第十号を迎えその記念特集号に何か書いて呉れという話が電話で持込まれた。

白楊ヶ丘同窓会東京支部が発足してから十年ということになる訳だが、人見知り屋の私はこの会合に出たのは第一回目のたった一回だったように記憶する。その後心臓病にとりつかれ入退院を繰り返す裡に、すっかりご無沙汰してしまった。横の関係の同期会の会合には積極的に出ても、縦横の関係の同窓会への出席はどうしたことか足が渋ってしまう。利用されたい、したいというわずらわしさが私には苦手のようだ。

然し思えば函中を出てから何年になるのか。十分な準備もせずに運よく旧制新潟高校へ入学出来たのは昭和三年の春だから、時間の経過は兎のように迅く、既に五十九年になるわけか。人間万事塞翁が馬という言葉があるが人間の運命の予測しがたいことの譬によく使われている。私は少年時、絵描きになりたい夢を持った。（幼時から絵を描くことが好きだったのと、中学時代の絵画の先生だった竹内先生が、私の線がとてもいいと褒められた言葉に影響されたのだと思う）「絵で飯が食えるか、それは大変なことだぞ」という非常に現実的な物の考え方をする年長者の言葉（まさにその通り）に私の夢は画餅に帰してしまった。年長者たちは私を軍人にしたいらしかったが、陸士、海兵など簡単に入れる所でなく又近眼だったので受験は出来なかったらしい。塞翁の馬に乗ってもし入っていても大東亜戦争初期に落馬してしまい今日なかったことだろう。家の近くにいた中学の先輩のSさんが二浪の末、新潟高校の理科に行っていたので、私にも受けてみたらということとなり十分な準備もなく受験することとなった。塞翁の馬は私を乗せて受験に成功せしめてしまった。高校へ行くんだったら中四から受験出来たのだから、その積りで準備をしたらうまく行けば通ったかも知れない。そして私の人生はまた変ったものになっていたかも。私が高校三年になった時、小学校、中学校とも同期だった相馬五郎君が新潟高校へ入って来たのには驚かされ、私はいよいよ人見知りをするようになったようだ。相馬君とはその後逢っていないが北海電力に入社しその後間もなく他界されたようだ。もう一人小学校、中学校時代同期だった米村喜一君と五、六年前小畑文雄君、窪田亮明君、大幸宏君らと会食したことがあったが、彼も今は亡い。私も今年の九月、満七十七才となるらしいが、戦争で召集され海の藻屑ともならず、蛸壺防空濠で人馬殺傷弾でとばされることもなく、悪運強く生きながらえられたものだと想ったり、ボチボチ鬼籍に入るのも近いのだと考える今日この頃である。

『五十七年前の想い出』

伏見滋史（昭7年卒）

五十七年前の私は旧制函館中学校の三年生でした。

昭和五年の春です。三年五組で教室は柔道室の側で、対岸はあこがれの遺愛女学校でした。担任の先生は予備役（当時は軍国主義はなやかな時代です。隠退したプロの軍人さんです）の高梨少佐で、或る日突然昼食時間に教室にやって来ました。生徒の食事状況の視

察でした。三年生にもなると運動部の選手は二～三時間目で弁当を食べてしまい、昼休みは校外のパン屋でパンを買い、すぐそばにあった時任農場の牛乳を飲みに行ったものです。然しこの日は担任教師が来たので、しかたがなく昼飯を食った生徒達は空の弁当を出して食べるまねをした訳です。私もその一人でした。

中には柔道部の選手で、他のおとなしい生徒の弁当も戴いた人もおりました。

二十分位で一応食べる時間が終ると、やをら高梨先生が教壇に立ち、訓辞とも、お説教ともつかない話をしやべりはじめました。

要約しますと「君達は三年生となり学校の中堅の生徒だ、これからが大人の生活に入って行くのだ。向いに女学校もあり、電車の停留所（当時は中学校前と云ってました）のそばにはもう一つ大谷女学校もある。色気のついた頃なので女性関係を呉々も慎しむ様に」と、実際はもっと乱暴な言葉で兵隊さんに話す様な口調でした。これで、一本とられたと思いましたが、おとなしくしていたのは二、三日で四日目位から相変らず昼休みは時任農場で牛乳のこいのを飲みに行ったものです。

秋頃のある日農場の帰り道で塀の廻した立派な家（あとで判ったのですが庁立高女の音楽の先生の家でした）の庭においしそうな葡萄がなっておりました。我々グループは七、八名で、すぐ相談がまとまり、二、三ふさを頂戴することになり身軽なのを二人塀にのぼらせて、葡萄を戴き、教室にもって帰り、皆にくばって食べらせ、とく〳〵としておりました。ところが翌日投げた筈のぶどうの皮からこの一件がばれて、グループ全員一時間位の説教をされ、さんざん担任に油をしぼられました。〝停学になるのかなおいら〟でも思いましたが、説教だけで済みました。遠い〳〵少年時代の想い出でした。

『函八会の奈良旅行記』

岡崎　弘（昭8年卒）

第三五回生（昭和八年卒）は函八会と称し、毎年クラス会を開催しているが、本年は五月十五日奈良・生駒山の霊場、宝山寺で開催、総勢十九名、久方振りにお互い元気な姿を確かめ合い、昔の腕白時代に若返って友情を深めたことは、誠に意義深いものがあり、これに参加した一員としてその感激の一端を記載するとともに、今回特にお世話になった宝山寺の新田義円氏および地元の橋本龍雄氏に対し厚く感謝の意を表したい。

開催地の生駒山・宝山寺は奈良県の西部と大阪府の境をなす生駒山の中腹にあって「生駒の聖天さん」の名で知られ、真言律宗大本山である。

同寺は延宝七年（一六七八年）湛海律師によって聖天（大聖歓喜自在天）が勧請されて以来、庶民信仰の寺として商売繁昌、病気平癒、交通安全、入学良縁等の願い事が叶えられるとして早くから庶民に親しまれてきた。

当日は曇天時折り小雨交りの天候ではあったが、全員揃って宝山寺参拝、胸中この集りを心から喜ぶとともに、お互い元気で参加しえたこの仕合せを改めて心に深く感銘した。参拝を終え、一同懇親会場の宿坊「洗心閣」に旅装を解く。

懇親会は先ず幹事の発言で、既に鬼籍に入った同期生の冥福を祈って黙禱し、次いで各地（北海道、関東、関西）参加者からの状況報告と情報交換が行われたが、函館地区参加者から来年は函館エクスポ88があるので、卒業五十五年を機に函館で開催してはどうかとの意見がでて検討することとなった。続いて宮本氏の音頭で一同函八会の発展と会員の健康を祈念し乾杯、宴に入る。

顧みれば学窓を巣立ってから今日まで半世紀以上の歳月を閲したが、この間戦争とその後に続く敗戦の大激変期に遇って、よく生き延びてきたものと不思議にすら思う。いまここに、生き残ったものが手を握り膝を交えて、来し方を語りお互い健在を確かめ合う機会を持ったことは、何ものにもまして尊く有難いと云わねばならない。酒を酌み交わしているうちに、古稀を超え深く刻み込まれた顔の年輪もいつしか緩んで昔の「オレ」「オマエ」の声がますます大きく、なつかしい昔話が無限に広がって歓談は何時果てることもなく続く。やがて終宴に近く幹事の発声により一同校歌「玄冥の北の一道」の歌詞に始まるなつかしい青春の歌を声高らかに合唱、幕を閉じる。

明くれば十六日早朝起床、空は昨日と打って変わり、薫風に香る五月晴れである。ここ生駒の中腹から遙かに眼下を見下ろせば緑に煙った奈良の平地が広く美しく見え、まさに咲く花の匂うが如くいまさかりの観である。

六時三分全員揃って拝殿に静座、勤行に参加する。荘重な読経の声は朝の冷気を震わせ、しばしわれわれを無我の境地に誘ない何かしら有難さが心に湧いて合掌する。

参拝後すがすがしい気持で大和の茶粥の朝食、朝食後新田、橋本両氏の案内で一同貸切バスにより名刹の拝観に向う。拝観は先ず西大寺に始まり、東大寺、元興寺、薬師寺等奈良七大寺の一部と斑鳩の里法隆寺である。

今回われわれが拝観した寺社仏閣はほんの一部であり(拝観の詳細は省略)また限られた極く短かい時間ではあったが、古代文化の発祥飛鳥、白鳳、天平時代の芸術、文化を直接見聞して、古代人の創造力と生命力のたくましさに痛感するとともに、今日まで生きていてクラス仲間と一緒にこれを観賞し、ともに喜びを分かち合えたことをしみじみと有難く思うのである。

(参加者、敬称略、岡田、岡崎、加藤(敏)、佐々木、杉沢夫妻、仙北、高橋、新田、橋本、浜田、宮本、藪越、札幌より本谷、函館より松田、伊東(幾)、岸田(義)、横田夫妻)

雨煙る
聖天様に
掌を合せ

佐々木孝允

大仏の
玉座に触れつ、
由来聞き

佐々木孝允

朝霧や
胡麻香烟る
歓喜天

岸田義雄

『日米野球の思い出』

成田安賢(昭11年卒)

昭和八年は、函館大火の年。この年の十一月八日、函館の湯の川球場で、日米野球第三戦が行われた。

そのころはまだ、いまの巨人軍はじめ、プロ野球球団は生まれていない。読売新聞社長でプロ野球の生みの親、正力松太郎氏が、米国のホームラン王ベーブ・ルース、ゲーリックら、米最強の選抜チームを招いて、日本側混成チームと対戦させたのだ。

投手は沢村栄治(京都商業)=のち戦犯、沢村賞に名を残す=、スタルヒン(旭川中)ら、捕手久慈次郎(捕手・主将早大=函館太洋出身)内野手三原修(早大)、水原茂(慶大)ら、外野手二出川延明(早大)ら、後年プロ野球の名監督、名審判とうたわれる選手たちが顔をそろえ、当時としては最高のレベルだった。

さて、第三戦はどうだったか。十一月九日の読売新聞のスポーツ欄トップ記事で紹介しよう。

七日豪雨のため延びた日米野球第三戦—函館に於ける全米軍対全日本軍の試合は八日も朝から晴雲相半ばする天候で九時頃初雪を見たがすぐ晴れ上り、前日来待ち構へたファンは続々と詰めかけ試合開始前立錐の余地もなき満員で大スタンドを埋め尽した。試合は午後一時、日本軍先攻で開始されたが、日本は青柴を投手に、米軍は速球王ゴーメッツをマウンドに送って多大な興趣を呼んだ。しかも米軍は第一回劈頭強打者エヴィレルがルース、ゲーリック、フォックスの三本塁打王を塁上におく満塁に大本塁打を右翼柵越しにかっ飛ばして一挙四点を納める殊勲を発揮した。しかしそれ以後青柴の快投はよく米軍の猛打を抑へ僅かに一点を加へしめたのみ。一方全日本軍は杉田、三原等がよく打ち四回と七回に各一点づつを報いて五A—二の接戦裡に二時二十五分戦いの幕を閉じた。

この日は、私のクラス(四年三組?)は国語の時間で擬古文をならっていた。試合の様子が気にかかり、授業などは上の空。みんなそうだったのではなかったか。

ところで、この間三十八回同期生のO君、F君と巣鴨のすし屋で一杯飲んだ。O君は、試合を見に行ったと言った。F君は、エスケープした生徒がいたのが職員間で問題になったが、先生も見に行ったということでうやむやになったと付け加えた。五十三年前のこと、ある生徒がゆうゆう観戦、一部先生も参加したとすると、午後の授業は、日米戦のためフリーにした組があったにちがいない。軍意識のしめつけがきつくなる直前の〝自由の残り火〟がまだ函中にあったのかもしれない。

(元共同通信社専務、現共栄企画顧問)

『ハナタは、帰らない』
― 無音のアッシュ考 ―

河村泰平（昭12年卒）

博多帰りの車中で櫛田神社の縁起書を読みました。天平宝字元年（七五七年）御鎮座、祭神は大幡主大神で天照皇太神と素盞嗚大神を併祀して、境内だけの博多祇園山笠の飾大山笠も蒙古来寇軍船の碇石もあって福岡の総鎮守としては最古の歴史を持つ、とありました。オオハタヌシのオオカミさまは主神であって、両側に御祖神の姉弟二柱を随えるこの神様は誰かと脳裏に遺つて居りました。其の後或る本の中に興味深い記述があったので簡単に御紹介を試み、大方の御知教を得たいと思います。

天宝四年（七四五年）九月玄宗皇帝の詔に『波斯経教、出自大秦、伝習而来、久行中国、爰初建寺、因以為名、将欲示人、必修其本、其両京波斯寺、宜改為大秦寺、天下諸府郡置者亦準』（唐会要四十九巻）。後進の我に卓越する技術集団、秦人が大挙して日本へ渡海して来て、斎した文化は有形無形限りなく養蚕、桟織を主に土木、建築、醸造等次々と先進的に立脚するに至ったことは雄略記に特記の由で、僕も睡魔と斗い乍ら函中の教室で教えられました。で歳月の流れる儘に名実共に着実に栄え彼等秦人の創建し奉仕したる神社も数百と云い、詳細に調査するのならもっと多数に上るというのです。で、大幡主大神は、大秦大主神の疑装語ではないのか。八幡宮、八幡は秦氏を讃えた彌幡（イヤサカ・イヤハタ）なる彌秦であろう。且つその本は謂う、秦氏が秦氏女に擬した玉依姫を祀り、秦氏の姓を頭上に冠し秦氏をもじった字音仮名・八幡を神称したもので、八幡宮と秦氏の関係は密接。と言い得る。として居ります。

八幡宮の神称は秦氏の姓を用い、祭神は大陸交通の道を啓開し、帰化を容易にさせた大恩人たる応神天皇、神功皇后、更に己れが秦氏の祖神とする、玉依姫を祀り且つ祭官に秦氏を以て充てた。（八幡卿彌秦説、真野勝利氏昭18 12月号雑誌謡曲界）。

大秦国は栴林とか栴暴とか種々文字を当てられ、景教碑文の研究ではシリヤとかエフライムとかアルメリアとか謂う由で旧約聖書の中のヤコブの子ヨセフの幼子がエフライム。彼を長老とする民族はヘブライ十二支族の筆頭、然かもエフライムを含む十支族が行方不明と今日伝えられて居る。この連中が「秦氏」として渡来したのかも知れない。歴史家は甲論乙駁ですが、秦氏自身の大秦大主神とは旧訳に謂う十二支族の祖たる、ヤコブ、別して称するヤ（イ）スラエルの事かと考えたりして居ります。次に訪れた「筥崎宮」の縁起書は、主神は応神天皇、神功皇后、玉依姫命。延長元年（九二三年）平安初期の御鎮座。仲哀帝の第四皇子で神功皇后は母君。福岡県粕屋郡宇美町に生れた第15代の天皇、溝地を開き農耕の奨励、百済より裁縫の術を伝え、呉国より織工を召して機械紡績の途を開く。（下略）

秦氏本系帳が丹波風土記により記録され之を基に謡曲加茂（金春禅竹作）に、初め秦氏女（玉依姫）葛野川に洗濯す。時に一矢あり上より流れ下る。女子之を取り還り来て戸上に刺置く。是に於て女子、夫無うして懐妊す。既にして男子を生む云々。仝風土記に秦氏女が玉依比売に変って居るので日本神話の玉依姫とは別人格とも言われ神功皇功が広神帝の実母なら玉依姫は秦氏の心の母ですか。仝神社境内の湧出石、宮前海岸のお潮井など、ヘブルかユダヤ宗教風ビハビアであります。近くにイヤハタと名付く著名製鉄都市も。人称の代名詞一人称主はI私はです。貴方は誰？に対して或る帰化人は右手人差指を自己の顔の真中に向け「秦氏」と答えたと思う。そうかねHATASHIですか。と。フランス語に無音のH（アッシュ）があって発音は此の場合アタシとなる。Wを附せばワタシ。歌手のAJさんは「椿咲く春なのにハナタワ帰らない…」何度聴いても秦氏と私と共に訓音による様だ。

秦民族が大挙して帰化したのは第15代応神朝の16年。帰化入植人数は当時の状況より学者の推算で大凡10万内外の様です。今から一七五〇年の昔の事でしょうか。

祇園祭は、シオンの祭り、でもこの当てはめた字ずらは、よく考えているとは思われませんか。

テクノクラート、吾れより数倍の技術水準を誇り、且つ異国の乙女も亦多く愛の花が咲き、結実して、エフライムを含む十支族は、大和の国に棲み、同化して行ったのでしょう。断える事のない時間と云うものが、呑み込んだに違いありますまい。愛憐の花園と化して。

（日華親善華陽協会副理事長事務総長）

『ハコダテベンコ随想』

本田幸兵衛（昭13年卒）

同期の集りの「よんまる会」（第四〇回卒業に因んで）も、今迄は年に一回だったのが、近年は二回にもなり、その都度泊りがけで旧交をあたためているのだが、帰宅すると家内から「あなたの言葉の抑揚が変で、平素は出ない単語が出てくる」と云われる。

悪童の昔に還って、誰に気兼ねもなく話しに花を咲かせてわい〳〵やって、くるのだから、当然と云えば当然である。

そこで、考えてみると、なかなか含蓄のある言葉が、わが愛するハコダテベンコにはある。

「ハンカクサイ」「タクランケ」などと云う言葉は、共通語では云い表わし難いし、「アツマシイ」に至っては、そのニュアンスに独得のものがある。

電車やバスで、窮屈に座っていて、隣りが空いたとたん、尻をモゾモゾさせてゆったりと座り直し、思わず呟く「あっアツマシイ」とくれば、その含むところは、たんにゆっくりしたと云うだけではなく、心も晴れ〳〵したと云う心持ちも込められ、共通語では置き換えようがない。

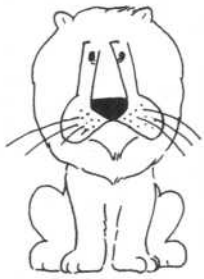
子供の頃、悪戯をしてはよくおふくろから、「アイラシクネーワラシだごと」と叱られていたのも懐かしく想い出されるし、「メンコイオンナワラシ」が、「アノネーエ、ソシテネーエ」と独得の尻上りのイントネーションでけんめいに語りかけてくるのも、まことに可愛らしい。

しかし、「メッケ」と云う女性の総称に関しては、多分に女性蔑視的な意味合が含まれているようで、昔ならいざ知らず女性上位の今の時代にはいささか相応はしくないのではないかと思われる。

函館は坂の多い街で、小生の通った小学校は当時の汐見で坂の上にあり（現在は函館山ケーブルの起点）、冬分など下校時には、沢山の子供達が、そりに乗って滑り降りている姿が今でも眼に浮ぶし、口々に大声で「サレヨー、サラネバサガカラモッコクルゾー」と叫ぶ声が耳に残る。「モッコ」とは多分昔の元宸の時代の蒙古のことで、〔そりでまっしぐらに降りてゆくから〕去れよ、去らねば坂の上から恐い蒙古軍が襲うぞと云う警告をしているのではないかと独断を専らにしているが、それがまことならば、函館は小供達ですら何と意味深い言葉を使っているのかと今更ながらこの地に生れたことを誇りに思っている。

今年も二回も皆と逢って、ます〳〵ハコダテベンコに磨きがかかることであろうが、何はともあれ白髪禿頭のジジイ達が無事息災で集い、宴の終りに懐しき旧校歌を、「玄溟の北の一道…」と声高らかに合唱するのが残された人生の最大の幸せである。

44



『函中獅子の会』

佐藤文三（昭17年卒）

ほとんど集まることのなかった四十四期生（昭和十七年卒業）で、首都圏在住の会に独断と偏見で「獅子の会」と名付けてはじめての同窓会をこのほど開いた。

日も語呂を合わせて四月四日（土）、函館出身の森卯一郎氏が創業した東京数寄屋橋のニュートーキョーに集い寄った者二十三名。函中入学五十年を記念してとの名分もあって仙台から駆けつけた者もあり、交通三時間以内は首都圏だと気炎はあがり、和気あいあいの五時間を過ごした。

『桜の想い出』

小泉龍彦（昭25年卒）

三月中旬、NHKひるのプレゼントの中で皆様の「桜についての想い出」をお寄せ下さい、という番組が一週間催された。丁度九州から桜前線が北上する季節、私も早速投稿したが応募者七〇〇名と多数のためNHKには取上げて貰えず、残念賞の結果だった。とは申せ、我等五十二回生の桜については今でも集う度に話題になる程強烈な記憶の中で活きている。昭和十九年三月、残雪の道を歩き庁立函館中学校の入学試験第一日目を受験した。

木造の風格とはちょっと異った殺風景といってよい講堂横に貼られた掲示を見ながら、坊主頭の百三十糎、三十五瓩程の少年達が集り夫々各教室に散った。「次、三〇三番小泉君」。君と呼ばれたかどうかは憶えていないが、とにかく三人の先生が座る三〜四米前に不動の姿勢、型通りの確認がなされ、それでは質問に入りますとなった。

「桜について知っている事を三分間の間に言いなさい」。この口頭試問だった。私の頭の中に桜の花が爛漫と咲き誇ったのを今でも鮮明に覚えている。

「桜は日本人そのものです。あの真珠湾攻撃の九軍神の一人古野少佐の辞世の短歌の結びに〝若桜、散ってかいある命なりせば〟は日本人の心こそ桜花

だと詠んでいます」と終りに答えた。小学校同窓だった将棋の二上棋聖は確しか「桜は三月から五月にかけて南は九州から北は北海道にかけて咲きその花は五辨で、雌蕊は一本雄蕊は数本…云々と繊細に理科系の話を三分間にまとめたようだった。

又柏野小の秀才、佐藤、長島諸兄は「サイタサイタサクラガサイタ」を皮切に「いつの世も日本人は桜を愛した」と続け楠正茂、正行の父子惜別、桜井の場、を語り、本居宣長の〝敷島の大和心を人問はば、朝日に匂う山桜花〟等を懸命に試験官の目を見ながら三分間？にまとめた。と入学後聞いたものだった。

以来早数年、桜の季節になるときまってこの口頭試問初日の光景が想い出される。受験した無頓着な教室、質問された先生のヒゲ、国防色のくたびれた服、それらは語られる美しい桜のひき立て役の存在にも思えた。

戦中教育を受けた私世代は「日本人は桜花のようにパッと咲いてパッと散るんだ」と教えられた。それは若い命を国に捧げるんだという道に組立てられていたかもしれない。

然し幾星霜を経、豊かな時代を迎えても桜花の美しく咲く喜びよりも、サッと散る寂しさに感動を覚えるのは私だけだろうか。同窓同期、必ず桜の季節に集い語る、今年も又例年通り「三分間の時間で言いなさい」の話題から乾盃と笑いが起き粋き活きとした血が躍動した。

桜こそ吾等、少年時代からの親友だった。

『私の中部交遊抄』

大　建二郎（昭33年卒）

二年前の六月一日である。同期会が内藤君や北原君の努力で開かれ、久しぶりに出席すると懐かしい顔の間に高橋雄太郎君が居た。中部卒業以来二十七年振りの邂逅であった。今、帝人の研究所に居るという。高橋君とは、柏野小、附属中、中部高と綿々と続いたつき合いであったが、彼は北大へ、私が一橋へと別れて以来、それこそ風の便りに消息を聞くのみであった。彼の顔を見、話をするにつれて、昭和三十年四月二日の入学式のことが彷彿として想い出された。新入生を代表して彼が挨拶をしたのである。まだ旧校舎の木造の体育館だった。たしか、高村光太郎の詩「道程」を引用した力強い挨拶だったなあ……。

帰ってから、埃りをかぶっていた昔の日記を取出してその日をめくってみる。

＊　＊　＊　＊

昭和三十年四月二日（土）くもり

家を出て中部高へ向かう。玄関に紙が貼ってあり、組分けが記されていた。一組に名前があった。体育館に行き出席をつけてもらい、一二七〇円を払う。前の方の席にすわる。校長、PTA会長、同窓会長の順で話があった。高橋が新入生代表で挨拶をした。トップで入ったということか。「僕の前には道はない。僕の後に道は出来る」の引用はなかなか良かった。附属出身がトップとは何となく気分がよい。俺は二番かな。再び校長の話が十時四十五分まで続き、その後クラスごとに分れる。一組の担任は黒沢耕生という。一見したところ田舎風かつ怖そうだが、話をすると冗談も云い面白そうな先生である。一組には、附属から佐藤宣紘、木村国成、鈴木武嗣、高橋雄太郎、遠藤千鶴子、渡辺ウタ子などの面々が一諸である。高校の雰囲気はこれまでの附属のアトホームな雰囲気と違い、生徒の数も多く、クラスも六つもあり、やってゆけるかどうか不安である。

帰って五時頃大正堂に教科書を買いに行ったら、外山達也に会い（四組になったという）、一諸に帰って来た。

＊　＊　＊　＊

四月四日（月）くもり～雪

朝八時十分前起床。のんびりと八時五分に家を出て高橋の家へ向かう。彼はもう家の前へ出て、「早く来い。」とどなっていた。学校に四分前についた。教室でだまってすわっていると、黒沢先生が来て、五十分間いろいろな話をしていった。

「勉強は一日四時間以上しなければならない。」

「先生に会ったら礼をすること」

「先生が入ってきたら、皆立って礼をすること」

とか、西洋紙をとじ合せた本のようなものを見ながら話していた。

十分の休憩の後、体育館で対面式というものがあった。校長の話のとき、誰かがオホンとせき払いをして皆大笑いをした。校長が怒って「やった者は出て来い。」などと云っていたが、誰も出てゆかなかった。

高橋と帰って来た。夜、柏木町方面で大きな火事があった。

＊　＊　＊　＊

こうして始まった中部高の生活は、次第に受験勉強に没頭するに至り、朝の二時、三時まで平気で起きている日が続いた。どの程度勉強すればどの程度の大学に入れるというメドがさっぱりわからないので、突っ込み過ぎになっていたような感じである。

そのせいか学校ではボケーとしていることが多かったが、清野先生の英語の授業だけは急に身が引き締って緊張したものである。日記にも「こらボンスケ！」「ゼロ助レイ子」「にわとりのようだぞ」「こら、きょろつくな！」「口をしめろ(?)」などの名文句を吐きながら、出来の悪いわれわれを厳しく鍛えてくれた先生の様子がしばしば登場してくる。この春、亡くなられたとお聞きしたが、御冥福をお祈りする次第である。

昭和三十七年に日本合成ゴムに入社してから二十五年、この間本社、四日市場などに勤務し、今回二年弱の大阪での営業の生活から東京に戻り、一転して経理財務の仕事をすることとなった。

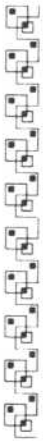
私の囲りの中部同窓の方を紹介すると、同期で中部時代いつもトップだった山下秀明君は、今度入れ違いに大阪商船三井船舶の名古屋支店次長で東京を離れたが、そのまじめさは昔といささかも変っていない。

北大医学部の井上芳郎教授は中部では一年下だが、義兄のため時々顔を見せ、かつての先生方々の消息を伝えてくれる。

日本債券信用銀行の吉川英機営業企画室長は、高校、大学、しかもゼミも同じという後輩だが、たびたび現われて新しい金融界の情報を伝えてくれる。

山陽国策パルプから創建化工へ出向している小笠原芳技術部長は同期だが、会社の仕事で偶然関係ができ、旧交を暖めたばかりである。

最後に、女房も「三十九年の有江先生のクラスだったので書いておいてくれ。」というので付記して終ることとしたい。



『しばらく振りの函館』

武田至正（昭33年卒）

NHK放映中の大河ドラマ「独眼竜政宗」の地仙台へ転勤して早や2年6ヶ月を経過しました。皮肉にも仙台に移ってまもなく小生の住所が白楊ヶ丘同窓会東京支部にキャッチされ、卒業後始めて高校の同窓会に出席させて頂きました。（50年春？）

その後は都合悪く欠席していますが、「中部高等学校」「白楊ヶ丘会」…等、なつかしい活字の印刷された書状、ハガキを受け取る事度々で、ほんとうにうれしく、なつかしく思っております。

そんな思いも手伝って、今年5月のゴールデンウィークに15年振りで青函連絡船に乗って函館へ渡り、レンタカーで市内、並びに近郊を2日間ゆっくりと観光しました。

市内では、小生の幼年、青少年時代の足跡をたどってみたのですが、その折、小、中、高校も尋ね、中でも函館での学生生活最後の学び舎となった「中部高等学校」は、鉄筋コンクリートとなっていて3年の大半を木造校舎で過した思い出と幾分隔たりはありましたがそれでもなつかしい思い出が次々と浮んで来ました。

又虻川君とも連絡が取れ、川村さんとも会い、酒をくみかわしながら楽しい一時を過す事が出来、さらに柏木町附近を散策時には、田村君、三浦君の家も拝見し思わず29年前の毎朝の登校時を昨日の様に思えて来ました。

さらにドライブでは、大沼、トラピスト、函館山、元町、五稜郭公園、啄木碑…などの名所、旧跡をまわり改めて函館の素晴らしさを感じ、一方元町、十字街、五稜郭、亀田等の町並変貌振りに驚き、五島軒での洋食、市内食堂でのイカ刺し定食等では、変らぬ味の良さに舌つづみをさせてもらいました。

来年の30周年記念式典には、ぜひ参加し一層旧交を深め函館を楽しみたく今から待遠しく思っております。

仙台は、7月より地下鉄が開通し、政令都市へ着実に歩を進め、今年は国際トライアスロンや東北博も開催、国際都市へと拍車をかける年となります。

ぜひ仙台の七夕祭を見物がてらおいで下さい。お待ちしております。

『冬の横津岳』

五十嵐守正（昭33年卒）

函中時代の友人、北川能典君、笈川浩一君と小生の三人は、学生時代の思い出にと、雪山の登山をすることにした。

実行は、昭和三十七年三月六日である。出発の前日、三人は、特ち物の分担を決め、集合時間等を打合せした。

雪山スキー登山であるから、アザラシの皮が必要である。

アザラシの皮は、スキーに取り付けることにより、登りでも逆行せず登り、滑る時はそのまま滑ることが出来、とても良い物である。

三月六日朝、函館駅に集合、七飯駅に向う。

石切場裏山まで徒歩で登り、雪が深くなって来たところから、スキーに替えることとした。

スキーにアザラシの皮を取り付けての出発である。（当時、小生のアザラシの皮は、スキーに紐で結び付ける程度の簡単なものである）

コースは、牧場を通り尾根づたいに登り、山小屋までとした。

先頭は、山に詳しい北川君、その後に笈川君、最後は小生と続いての出発である。

曇り空、三人は前進した。回りの木々は、雪化粧している。

林を過ぎ牧場近くになって来たころから、雲が低くなって来た。山特有のガスである。

見る見るうちに、回りの景色が消えていく、見えなくなって来た。

先頭の北川君に遅れまいと、笈川君、小生と続く、牧場を過ぎたころから吹雪となって来た。三人は声を掛け合いながら前進を続けた。登っていくうちにアザラシの皮と、スキーの間に雪が固まる。前進どころか横に滑る。

ストックで雪を取りながらの前進である。吹雪も止み、自然と回りが明るくなり、景色もみえて来た。尾根づたいに登っていた。

山小屋にはあと一歩、三分の一くらいまでのところまで登って来た。

晴間を利用して三人は昼食を取ることにした。汗を流した後の食事は旨い。中は梅ぼしであるが、格別の味がするものである。

雪の上に座り、握り飯を食べる。身近かなところの雪の表面二～三センチを取り払い、下の真白い粉雪を手にして、口の中に入れる。冷たさで一瞬身振いするが、その感触、冷たさと、歯ざわりといい、雪山での楽しい一時である。

昼食後、三人はまた前進を続けた。雪山は天候が変りやすい。また雪が低くなって来た。

山小屋に近づいて来たころから本格的に吹雪となって来た。

三人は歩を早めた。吹雪が一段と激しくなって来た。

小生のように眼鏡を掛けている者は不便である。眼鏡に雪が積る。手袋のまま眼鏡を拭くが、水が付いたままである。なんとか前が見える。また前進を続ける。

ようやく、山小屋に着いた。一同ほっとした。小屋の中の薪ストーブに火を付ける。

ストーブは、ドラム缶を半分にしたものである。火が勢いよく燃える。

小屋の中が暖かくなって来た。三人は夕食の用意。

一仕事を終え、一段落してから三人はウイスキーで乾杯、勿論、雪を入れてのオンザロックである。雪山での一番楽しい一時である。ランプの光の下で、三人は夜遅くまで語り合った。

翌朝は雨であった。帰りも尾根を通り、牧場径由下山することにした。

帰りも北川君を先頭に笈川君、小生と続いた。先頭の北川君の滑ったスキー跡に、自分のスキーが入ると、あとはなかなかその跡から出ない。スピードは増すばかりである。先頭の北川君が止まった。続く笈川君は制動をかけたが止まらない、転ぶ。

続く小生も制動を掛ける。雨で雪が固い、制動はきかない。ザザーの音と同じに転ぶ。

三人は大笑い。

今度は制動を掛けながら、ゆっくりと下山、無事七飯駅に着いた。

三人の学生時代の思い出である。

『夢現の間』

山本興太郎（昭33年卒）

今、司馬遼太郎著「菜の花の沖」を読んでいます。主人公はかの高田屋嘉兵衛です。函館に生まれ育った我々にとっては、彼の名前を知らないと恥ずかしいくらいの人ですね。護国神社の長い坂の下に彼の銅像が建てられているのも皆さん先刻御承知でしょう。銅像が建てられるくらいですから、函館に深い縁が有る筈ですが、私にとっては名前は兎も角、その実像が良く判っていなかったというのが正直なところ。恐らく、社会科の時間に習ったのに名前以外はすっかり忘れてしまったということでしょう。この本が数年前に出版されたことは知っていましたが、読んでみようと思いながら、何となく今まで手元に来なかったのです。それが、本屋で見つけて躊躇無く手に入れたのは、北海道を離れて7年という時間がその気にさせたと言うべきでしょうか。

読み始めて吃驚りしました。作家の力量によるのでしょうが、嘉兵衛が生き生きと甦って、一緒に見たり、聞いたり、話したり、感じたりしているような気にさせられます。菜の花咲く淡路島の水呑百姓の倅だった嘉兵衛がひょんなことから船乗りになり、蝦夷地から択捉、国後島まで出かける巡り合わせになるわけですが、時代が世界的激動期にさしかかっていて、その余波を受けたわけでしょう。幕府の対ロシア政策の片棒も担がされたりしたわけですね。嘉兵衛を蝦夷地へ駆り立てたのは物資の流通の仕組みに眼が開かれたから、と言うよりはむしろ金儲けがしたい、一山当てたいというのが直接の動機で、一生雇われ船頭じゃ厭だということでしょう。この辺の事情は現代にも通じますね。その彼が、今から二百年程前、蝦夷地一番の良港と見立て、以後、活動の基地を当時の藩庁が置かれていた松前から移したのが箱館だったので、これが箱館にとって〝幸運〟だったということでしょう。当時は鎖国とは言え、幕府のある江戸から遠く離れていた蝦夷地にあっては古くから大陸の文化が浸透していたことや、幕藩体制に囚われない、経済は国境を越えるということを肌で感じ、自由な発想をする人々が集って来たこと等が混然一体となって箱館の一種独得のハイカラな雰囲気を作り出す元になったのではないかと思われます。そういう土壌作りに一役買ったということで、高田屋嘉兵衛は函館の歴史に欠かせない人物なのですね。ところで、優秀な船頭であり商売人でもある嘉兵衛の、憧れの蝦夷地を初めて眼にした感動、箱館を沖から見て一眼で天然の良港だと見抜く眼力、東蝦夷地で会ったアイヌの人達に対する人間としての連帯感、北方から島伝いにやって来るロシア人との折衝等々、全てをひっくるめたこの人物のスケールは何拠から来たのでしょうか。国は鎖国でも、海には境界線が無いという認識から生ずる自由度の大きさでしょうか。又、自然から、海から学んだ、お天道様は誰にでも平等だという思想でしょうか。私は後者が当っているんではないかと思いますし、これは作者自身のバックボーンでもあるでしょう。嘉兵衛の当時、蝦夷地ではアイヌの人達が松前藩に絞りに絞られて悲惨な生活をしていました。幕府が有効な対策を立てず、現場にまかせ切っていたわけですが、現在にまで尾を引く大きな問題となった根はこの辺に有りそうです。

ところが最近、日本特有の成人T細胞白血病の原因ウイルスを調べて、アイヌの人達の10代では10%、40代以上ではほぼ半分が感染していることが判り、非常に驚きました。対照としての北海道の和人では僅か1%が感染しているという結果ですから、アイヌの人達で如何に高率かお判りでしょう。日本全国では、西南部（九州、四国、沖縄）に感染者が多いのですが、高率のところでは40代以上で3人に1人の割合でウイルスキャリアーが居ります。これらの結果から、同じ病原ウイルスを共有するものとして、北海道のアイヌの人達と沖縄の琉球人とは人類学的には同根であり、縄文時代から日本に住み続けている原日本人であり、和人の侵入によって南北に分断されたまま現在に至ったとする見方も出来るでしょう。とするとこれら南北に分断された原日本人に共に、元々保持していたこの白血病ウイルスが連綿として伝えられて来たことになりますか。もっとも、この原日本人が何拠から来たかという問題は依然として残りますが。高田屋嘉兵衛の時代に血液が調べられたら一体どんな結果が出たでしょうか。函館のことを書こうと思っているうちに仕事の話になってしまいましたが、今後の仕事として皆さん既に御承知の後天性免疫不全症候群（AIDS）をテーマとして取り上げることになりそうなので、感染しているかどうか心配な人は調べてあげますよ。アハハ…。最後に、この二百年の函館の歴史のフイルムを頭の中でゆっくりと巻き戻し、嘉兵衛の眼で初めて箱館を見たときの様子をシミュレートして見ました。実に興味深いものですよ。皆さんもやってみませんか？ちっとも難しいことは有りませんよ。想像は自由ですから。

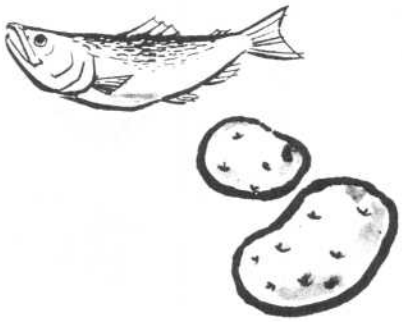
『ファイルの中身』

泉　清　美（昭37年卒）

最近、「函館中部高校」というファイルを作りました。もっと前から作っていれば、同窓会だよりなどを綴じておけるし、何かと便利なのにと、ファイルの薄さを悔んでいます。函館に住むファイルの先達には、凄いのがいて、高校時代の実力テストの結果（二・三年生が同じ問題を解いて、通しで順番をつけるテスト）まで綴じています。二十年以上も前なので、もう学校の倉庫にも残っているかどうか。同期生の名簿の方は充実していて、五年に一回ぐらい新しいものが発行されています。まだ結婚していないのが私も含めて若干いるので、姓が変らない同期生には、秘かにエールを送っています。

東京周辺に住むのが約百名で、年に一回ぐらいは集まりたいと思うのですが、会場・案内状などモロモロを考えると仲々実行はスムースにいきません。いつも秋にある同窓会に便乗して、二次会という形で集まっているのが現状です。それでも今までに四・五回は、五十名程度の同期会を開くことができました。ファイルの中に、「今回は、カジュアルに、或いはワイルドに」と書かれた案内状があります。この同期会に、少々遅刻したS君などは、何か特別の趣好を期待したらしく、「今日はワイルドというから楽しみにして来たんだしと、首の汗を拭きながら言うので、周りの人は笑ってしまいました。

ファイルには、チャリティ・セールの売り上げ高の記録もあって、この時は上磯（かみいそ）の川で前の日まで泳いでいたという鮭が、一本、千五百円。醤油漬けのいくらが二千円。数の子入りの松前漬が千二百円、変ったところでは、あの柔道の山下選手の色紙が五百円という値段をつけて売り出したところ、総額十万円以上の売り上げになりました。「なんぼ」かは純益として函館の同期会の資金に加算されたわけです。この好評に気をよくして、函館の連中は今度は、何を東京に運ぼうかと知恵を絞っているようです。今年で六四期生は卒業して二十五周年になるので、地元ではいつにしにも増して盛大な会を企画しているらしいので、お盆休みを利用して参加できたらと願っています。



『函中三八会』

菅　原　大　作（昭38年卒）

函館中部高校を昭和38年に卒業し、主に関東地区に在住する者の同期会が、「函中三八会」である。

38年は、1クラス50人編成で7組約3百人が卒業した。このうち、北海道外に住んでいる人達で、住所が把握できている人は百7人おり、内関東近県には86人がそれぞれ勤務あるいは御主人の勤務の関係で住んでいる。

同期会は、昭和50年に有志数人が声を掛け合って始まった。最初は、それぞれが把握している人達の住所を持ち寄って、約50人を対象に案内通知を出し、第1回目は百45人が集まった。そして、年に1回程度の会合を行い、多い時で40数人、最も少ない時で10人程が集まって、開催の都度新しく住所が判明する人などを加えて約90人にまでなった。その後、函館の、と言うより全体の同期会である函中65会が同期の全員を対象とした住所調査を58年に実施、それで新しく住所が判明した人も増えて現在の百7人になった。

最近の会合は、一年に1回開催の原則を考えれば本来は61年度に行わなければならないものであったが、幹事の怠慢もあって、年度替わりの4月23日（木）午後6時30分から、東京・新宿のワシントン・ホテルにある「三十三間堂」で行われた。この会場は、同期の村本氏が勤務している関係から昨年度に引き続いて利用したものである。

写真は、前列右から、宇美猛俊、品川邦嘉、一戸光一、山初省吾、中列・栗原（関川）訓子、高向（三田）暁子、金田（平光）祐子、市戸喜里子、橋本（秦）祐子、大島（宮岡）礼子、菅原大作、後列・八木幸雄、梅津洋子、村本長穂、森昭紘、川村宏、小原洋一、吉沢隆雄。

開催に当たっては、平日の夜ということもあって、遠方の人の参加が少ないことも考えてはいたが、参加者は18人に留まった。しかし、18人中7人が女性で、比率的にはこれまでで最も女性が多く、大変和やかにまた賑やかに終始した。

当日は、38会全員の住所録と欠席者からのコメントをプリントして配付すると同時に近況報告や懇談、記念撮影が行われた。会は、午後9時過ぎ終了したが、全員別れ難く二次会には、新宿・歌舞伎町の「根岸」(宇美、道下両氏の店)に移動して、11時過ぎまで懇談した。

『同窓会に出席して』

飯田(旧姓小林)明子(昭42年卒)

昨年秋、新聞で、母校、函館中部高校の同窓会が行われることを知り、函館を離れて十余年が過ぎていつもただ懐かしいだけだった高校時代が目の前に現われて手に届くものになった様に感じられ、早速連絡先へ電話をし同期の世話役の方を教えてもらい、久しぶりに、まるで子供が、遠足の日を待ちわびる様な気分を味わいました。さて、その11月21日、どんな顔ぶれなのか、何人出席するのかなど思い廻らしながら会場へ。控室になっているロビーには、大勢の男性陣がなつかしそうに語り会っていらっしゃいました。なつかしいあのアクセント、函館に居る様な気持ちになりました。かなりのお年同志なのに十五、六歳の青年の会話そのもの。またさすが函中生、熟年になっても気迫に満ち、あの『白楊魂』未だ健在せりと、嬉しくなりました。私に比べて皆さん大先輩ばかり、女性の出席者は、少なく旧制の狭き門を感じました。控室で女性の先輩と話す事が出きました。ほんの一・二年前に、こちらに転居された方で、函館の同窓会の様子を伺い、豊岡、山本、浜岡緒先生方が出席されたそうです。お互いに先生達の本名がなかなか出てこず、あだ名で分り合い、自分も、中部校生に戻った気分になりました。会が始まり自分の卒業期のテーブルに着き、乾杯。同期生の顔振りに、驚き、ここで会えるなんてと考えてもみなかった事実に、懐かしさで一杯でした。学生時代の顔が浮んできてお互いに変らないねと言いつつ、皆さんそれぞれ成長の跡を感じさせました。語らいは弾み、現在の事、他の友人の消息等、かなりの同期生が、こちらに来て居る事や同期会も設立しているとか。何回目かの同期会の写真を見せてもらい、益々懐かしく、出席してよかったと思いました。諸先輩達と斉唱した校歌と同窓会歌、結構記憶しているもので、同窓会の後も二週間程歌詩の一節が口からしばしば出て、つい歌い出してしまい、懐かしさに浸っていました。それと、地学を教えて下さっていた古谷泉先生が、校長に就任され、益々我が母校の発展に力を注いで下さるとの御挨拶をいただき、私達の若い日の思い出のこの大切な学舎をよろしくお願いしますとの気持で一杯でした。

『音楽を楽しむ』

阿部博光(昭48年卒)

コンサートを終え、友人と軽く飲んで家に帰ると、同期の長島君からこの原稿の依頼があったと家内に言われた。いつもならご遠慮願うところなのだが、何故かこの日は、高校時代の友人と妙に縁のある一日だったので、引き受けることにした。

その日、私の所属しているオーケストラのコンサートが横浜であり、親友のS君が美しい女性を同伴して聴きに来てくれた。作家志望の彼は新聞を読むのが趣味で、いつも持ち歩いているのだが、この日も同じで、カッコよくその女性を紹介した彼の手の中には、読み古しの丸めた新聞が握られていた。思わず微笑んでしまったが、私と同じ函中出身だものと、変に納得してしまった。

彼と別れたあと、今度は終電近い京王線で函館北高校でトランペットを吹いていたM君に、それこそ14年振りに偶然出会ったのだった。高校時代、吹奏楽のコンクールでライバル同志だったし、共通の友人も多く、私がオーケストラでフルートを吹いていることも知っていたようで、開口一番「まだやってるの?」ときた。少々ムカッとしつつも「これしかできないから」と答えようかと思いながら彼の手元を見ると、大切そうにトランペットのケースをかかえている。勤め先でジャズバンドをやってて、今日は新橋のホールでコンサートだったそうだ。ここでも又、私は思わず微笑んでしまった。高校を卒業して14年。彼もまだ高校時代を引きずって生きているのだろう。「練習時間がなかなかとれなくてネ」なんて実に真面目なことを言ってくれる。職業音楽家の私もつい「練習時間がなかなかとれないんだよ」と答えてしまった。

高校時代、今はなくなってしまったが、吹奏楽部の部室のあった白楊会館の長い廊下で私は良く練習したものだった。プロになるとも、なれるとも考えもしなかったが、ただひたすら練習していた。時には食堂のおばさんが、定時制のあまったパンや牛乳を差し入れてくれることもあり、夜遅くまで練習したあの頃が実になつかしくなる。

趣味が仕事になると、楽しさより苦しみの方が多くなるなんて言うと、贅沢だと良く言われる。もっともだと思う。

せいぜい初心を忘れず、少しでも多くの人に、気軽に音楽を楽しんでもらえればと考えている。

『調査のつれづれに』

北村知文（昭48年卒）

早いもので、卒業以来もう15年の月日がたってしまいました。この原稿を依頼されて、ふと年数を指折り数えてみて、今さらながら〝歳月、人を待たず〟ということわざを実感しています。私は不況下の昭和52年に学生生活を終え、女性にとって厳しい就職環境の中で何とか今の会社に入社し、以来世論調査、市場調査といった社会調査関係の仕事にたずさわって今日に至っております。私の同級生達（女性ですが）も色々な分野で、それぞれ活躍していると聞いていますが、彼女達も色々と悩みが多く、とりわけ家庭と仕事をいかにうまく両立させるかに、相当腐心しながら頑張っているようです。

ところで私のたずさわっている〝調査〟という仕事は、物事を数表で表わす作業であり、その時々のテーマを視覚に訴えることにより、世論を喚起することに一役買っているわけですが、調査結果が、そのまま日本全体の縮図として現われてくる時は、やはり興奮を覚えずにはいられません。婦人の意識調査等を実施すると、私がたずさわったこの10年間で明らかに大きな変化をとげており、とりわけ我々女性の社会進出が顕著になっていることなどがよくわかります。（しかしながら、その待遇については、改善されつつあるとはいえ、まだまだ男女平等とはいえないようです。）

私自身も主人の協力のもとに、主婦業と職業人の二足のわらじをはいて何とか毎日を送っていますが、子供の保育のこと、職場における待遇のことなど、女性が外で男性に互して働けるような環境には、いまだ遠いような気がします。

とりとめのない事柄を書きつづってきましたが、私のこれからの人生も、社会の状況によって、予想もつかないような展開を見せるのかもしれません。その様な中でも、女性として、常に冷静さを忘れず、自分のとるべき道を見きわめていきたいと思っています。

『ぱいの会』

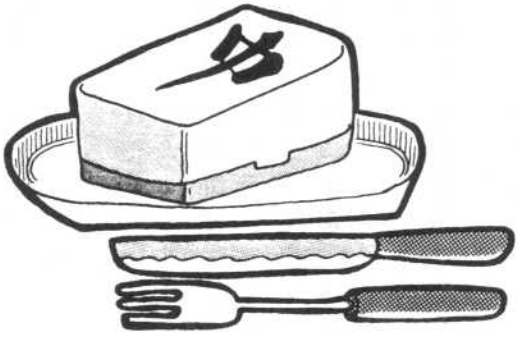
常陸千尋（昭54年卒）

昨年のお正月に函館ホテルロイヤルで同期会を行いました。

「あけましておめでとうございます。本日はご多忙のところ、多数お集まりいただき誠にありがとうございます。昭和54年卒業第81期である私たちの会の名称も、81にちなみ、「ぱいの会」と名付けさせていただきました。初めてのことゆえに、多くの不手際もありましたが、新春に免じお許しいただければ幸いと存じます。尚、次回同期会も、近年中に開催し、更に友情を深められれば誠にうれしい限りです。皆様のご健康とご多幸をお祈りしながら、ぱいの会一同の友情に乾杯！」

これはその時配った同期会名簿の挨拶文です。卒業以来初めての大がかりな会で、二百名近くが参加して行われ、大変盛り上がり、担任であった諸先生もご参加をいただき、無事終了いたしました。

幹事さんは函館の有志の方々で、女性が中心に動きました。また数年たったら開きたいものだと話し合っております。忙しい毎日を過ごし、東京での同期会を開く機会はありません。しかし白楊ヶ丘同窓会東京支部大会に参加させて頂き、その後参加した数名で短い時間を過ごすことができ、同窓会のお誘いをうれしく思います。私たちは若輩者ですが、今後とも一層のご指導をお願いいたします。



「ぱいの会」シンボルマーク

会員の皆さんよりのお便り

昭6年卒　藤野節夫　現在無職、年令のせいもあり、五体が弱のたようです。

昭8年卒　寺島龍二　健康すぐれず7、8、9月手術のため入院、現在自宅療養中にて東京支部親睦会に出席できず残念です。よろしく。

昭8年卒　橋本静雄　本年2月古稀を迎えましたが、依然として勤務中、ぜんそく、リウマチの気はあるものの日常生活には支障なく快適とまではいかないが、まずまず。

昭9年卒　秋浜晴彦　昭3～14年、英語の先生だった福田英男先生（東北大学名誉教授）に仙台のご自宅でお目にかかりました（昨年10月）。ホリの深いご容貌は昔と少しも変りませんでした。

昭10年卒　村井　保　60年4月会社退職、現在修善寺にて老後生活に入りました。

昭10年卒　金田貞行　昨年8月に函館より移転して参りました。今後ともよろしくお願いします。

昭12年卒　河村泰平

拝復

風薫る候尊兄益々御清栄にて何よりに存じます。扨て、突然、思いかけず御芳書を賜り感激して居ります。

故郷を離れて半世紀、お互い数奇な運命にもて遊ばれ右や左を見て級友の戦死やら鬼籍やら遺った吾身は、今浦島の如きものと思います。が、山口大の細田兄、安味兄、渋谷兄、上野兄、森兄、仙台の佐々木兄、藤山兄、水谷兄、川原兄、松座兄、宮本兄らと文通も出来ました。一男三女及び孫四名に恵まれ末娘アイデンティカルツインは、姉もそうでありましたが、二人もSKD幹部のあと渡来しラスベガスを根拠として活躍して居ります。今秋頃は、私共も娘達が逢いたがって居りますので行って見ようかと思って居ります。

時々函館より御送附の名簿を拝見し、各兄が夫々の分野での御活躍を知り、倖せに思って居ります。

私には生来同胞に恵まれず従って函館にはイトコにハトコ位のもので叔父の美馬病院長も去年卒去しましたので、自然郷里には、行き度くても通り一ぺんの観光となり、きすぐれて松風町で与太る事もありません。

ブルドッグの如きブス犬でも忠実な犬とコンビで一冬暮して見たいなア等、思わぬでもありません。

思いがけず尊兄より御芳書を賜り、いま、いろ〳〵の想いが湧いて居ります。

最終的に高血圧で会社役員をようやく辞任して、いま血圧は安定、GTTも大丈夫で、息災で暮して居ります。

今度同窓会などありましたら、是非御一報下さい。先約さえなければ必ず出席したく所存して居ります。日頃御多忙の事と推察して居ります。

折角御自愛下さいます様に。　敬具

前田徳尚様

昭14年卒　加藤健司　山梨大学工学部に元気で勤務しています。本年3月定年退官しました。

昭15年卒　仲村庄司　クリニック事務長と宗教関係で相変らず忙しくおかげ様で元気にやっております。昨年5月函館を訪れ高島小太郎先生と益谷寿君とも再会の機会を得ました。

昭15年卒　渡辺亮治　昨年3月九大教授を停年退官しました。現在は東洋大学工学部講師をしております。

昭16年卒　大森志郎　企業の技術指導や研修会で各地を馳けており、第二の人生を元気で過ごしております。

昭16年卒　阿部海三郎　2年前に30年余り勤めたモービル石油を定年退職しました。その後は引続き嘱託で勤めていますが、体調はむしろ現役時代よりもよく、元気で結構気忙しく過しています。

昭18年卒　杉浦光雄　順天堂病院外科で毎日手術をしております。確実に1年毎にトシをとっていくのに驚いております。

昭19年卒　大島　隆　昨年9月8日、父が92才老衰でなくなりましたが、天寿を全うし、幸せな人生でした。

昭19年卒　押野幸雄　定年延長で勤務していた清水市の八大海運を昨年10月退職予定を年末まで手伝えということで相変らずがんばっております。

昭20年卒　浅野　博　関連会社に移り2年の単身赴任です。何のお手伝い

もできませんが、皆さんによろしく。

昭26年卒　北村義広　本年4月より丸紅香港会社勤務となりますので、休会させて頂きます。

昭27年卒　佐藤堅一　昨年4月から東京都福祉局社会保険指導部長（電212―5111）に転出しました。

昭29年卒　浅岡　勤　60年5月、6年振りに名古屋から東京に戻って来ました。名古屋には「中京北海道クラブ」という道人会のようなものがありましたが、流石に函中出身者はいないようでした。

昭30年卒　堀江郁子　毎年会費納入は面倒でしょう。5年なり10年分の会費を一括納入で終身会員の方法もあってよろしいのではございませんか。

昭30年卒　信太延一　東京支部発足10周年おめでとうございます。東京を離れて以来出席できず残念です。ご盛会を祈ります。

昭31年卒　唐沢フミ子　記念大会おめでとうございます。残念ながら出席できませんが、高知の空より大会の成功をお祈りいたしております。

昭34年卒　伊藤雅子　千葉へ来て早や20年、受験を控えた息子共々に落着かない毎日を送っております。

昭34年卒　村岡静生　一昨年10月ニューヨークから帰国し、大阪勤務（三和銀行本店外国事務部）となりました。いずれ東京に戻ると思いますが、またよろしくお願いします。

昭35年卒　前　良一　勤務先変更しました。前田建設工業地下鉄布池町作業所（電052(937)8267）

昭35年卒　桜庭　宏　函館ではまず想像できなかった洪水にあいやっと落着きを取戻している昨今です。

昭36年卒　小林嘉則　昭36年卒の63期会は東京近辺に百名近く在住しており、毎年7月に会を開いております。今年は40名の参加がありましたが、同窓会の方は出席者が殆んどないのが現状です。

昭38年卒　木ノ川義景　昨年11月より韓国へ約2年出張中です。皆様によろしくお伝え下さい。

昭42年卒　松坂きみえ　60年10月の同窓会、とても来て良かったと感じました。

昭42年卒　林　千恵子　年寄りから幼児まで入れて7人家族（子供3人）の恵業主婦で頑張っています。今年の桜島の降灰は昨年より少なく特に冬は暖かく快適に過ごしています。

昭44年卒　片岡　進　12年間勤めた幼稚園の団体を61年8月退職しフリーの教育ジャーナリストとして再出発することになりました。よろしくお願いします。

昭47年卒　小沢敏之　勤務先変更、建設省大臣官房官庁営繕部管理課（電580―4311内2433）

昭47年卒　中沢　裕　今回初めて参加させて頂きます。現在NTT通信網第一研究所（伝送部門）に勤務しておりますが、早いもので8年になります。函館の方、同窓の方とお会いできるのを楽しみに参加させて頂きます。幹部の方々にお礼申し上げます。

昭51年卒　堀坂　清　勤務先変更、富士ゼロックスTS部TS3課（電205―6151）

昭51年卒　村本小百合　結婚して山崎から現姓へ変わりました。また住居も板橋区志村2―23―4―206〒174に変わりました。

昭51年卒　張　敏代　現在川崎駅前佐藤歯科で勤務医をしております。みんなの顔を見たいのですが、今回は都合がつきませんので欠席とさせていただきます。

昭51年卒　梶山博司　国鉄最後の年、何かと慌ただしく過ごしております。

はこだて賛歌

作詞／前川　和吉
作曲／広瀬　量平
制作／HBC函館放送局

一、誰かに住む街　聞かれたら
はい　函館と答えます
明るく胸はり　答えます
親子みんなが住みついて
いのちかけたい海の街
そんな街です　そんな街です
はこだて

二、手紙を書くたび　ていねいに
ここ　函館と書いてます
しあわせ感じて　書いてます
旅に出てみてそのよさが
しみじみわかる詩の街
そんな街です　そんな街です
はこだて

三、槌音はずんで　また伸びて
いま　函館がひらけます
陸から海から　ひらけます
巴じるしかがやいて
あすがたのしい若い街
そんな街です　そんな街です
はこだて

新たな交流と発展――北の飛躍をめざして

昭和63年開通

青函トンネル開通記念博覧会

函館EXPO'88『青函博』

昭和63年7月9日～9月18日

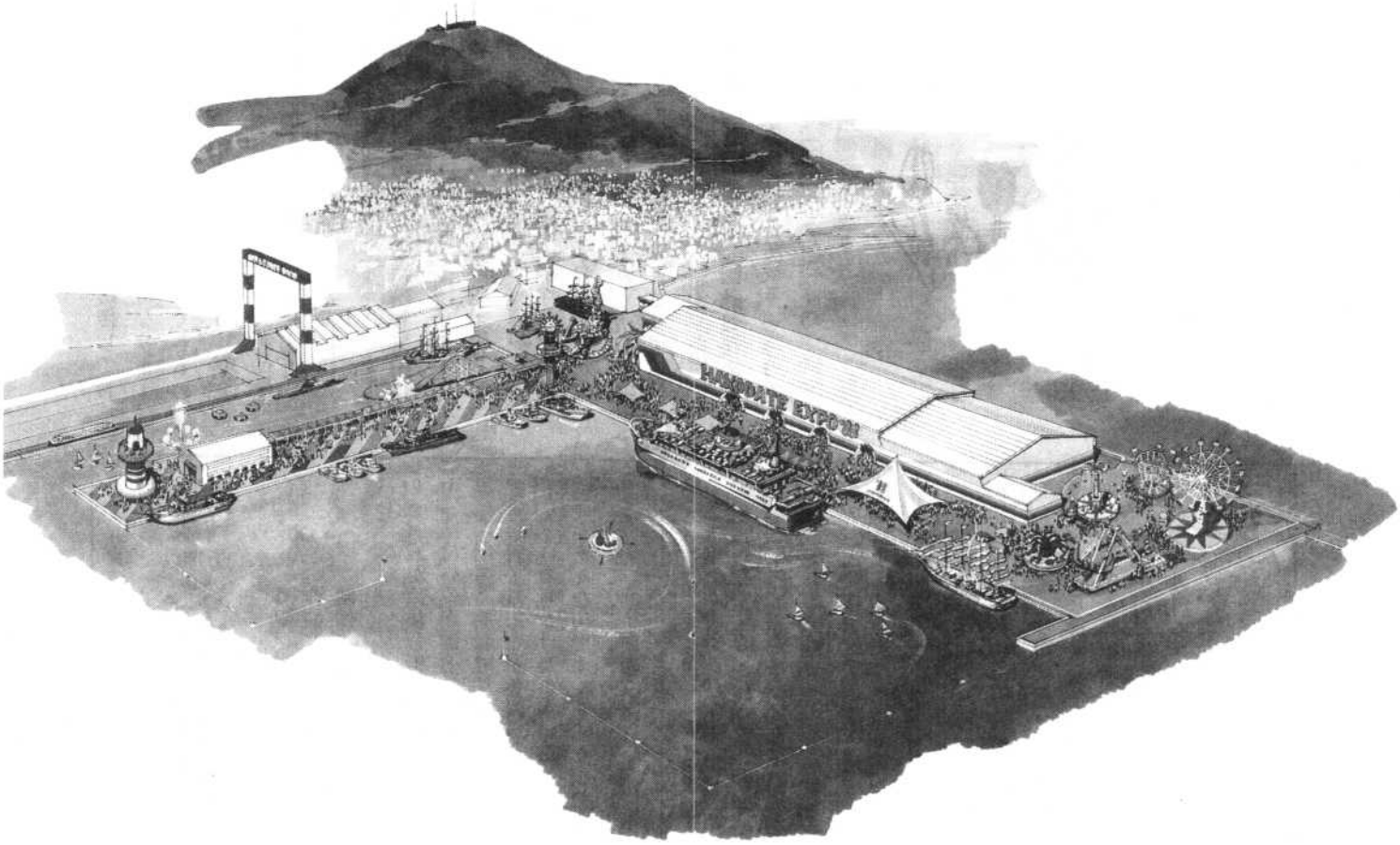
4分の1世紀にわたるナショナルプロジェクトである青函トンネルの開通を記念した函館EXPO'88「青函博」が来年7月9日(土)から9月18日(日)まで72日間にわたり函館・弁天町地区14haで開催されることになりました。

この青函博は、多くの歴史の拠点となり、古さと新しさが溶け合う詩情豊かな〈函館〉そのものを巨大なステージとして繰りひろげます。そして、函館市はもとより、道南全体を博覧会のステージとして色々なイベントを展開し、そこに多くの人々が集まり、共に明るい未来について考えていこうとしています。

ご家族やご友人、あるいは同期会などぜひいらっしゃってみたらいかがですか。

主なイベントは次のとおりです。

1. シンボルゾーン
   エキスパレスの導入部、ランドサットから見た青函圏・北海道が展開されます。
2. テーマゾーン
   未来をイメージさせる日本最大の映像が写し出されます。
3. 企業出展ゾーン
   バイオ、コンピュータヘルス、ハウジングなど技術の最先端が勢揃い。
4. 北海道・函館郷土館
5. 青函トンネル館・交通館
6. 自由広場・レストラン・バザールゾーン
7. 180度回転する立体映像ゾーン・映像館



北海道はおいしい食卓です。みんないい顔、人生フルコース！

函館、札幌で『世界・食の祭典』

JUNO'S JAPAN 1988

昭和63年6月3日～10月30日

「食べることはいいことだ。こころがひとつになることだ。地球が平和になることだ。」をメインテーマに、青函博と連動して、"World Food Festival" が開催されることになりました。

この祭典は、食という人類共通のテーマのもとに、世界の人々が集まり、北海道の澄みわたった空と雄大な自然に包まれながら食を考え、食を楽しみ、国際的な交流を深めることを基本にしております。

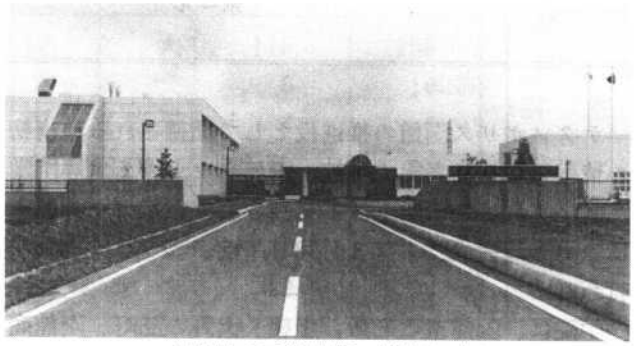
函館会場は、駅周辺（朝市～松風町）、五稜郭、湯の川、西部倉庫群を中心に展示、イベント、世界のグルメレストランなどが展開されることになっており、450万人の動員を予想しています。

主なイベントとして次のようなものが予定されております。

1．世界の祭り、日本の祭り
2．収穫祭
3．食への祈り、ジュノーの女神像コンクール
4．「食の祭典、はこだての祈り」
5．文化財でみる日本の歴史展
6．世界のイベントショー
　(1)、本場一流のミュージカルの招へい
　(2)、ニューヨーク・シテイ・バレー団の協賛公演
　(3)、小沢征爾とロンドンフィルハーモニー・チャリティ・コンサート
　(4)、高田賢三ファッションショーなど
7．食の祭典特別列車
8．北海道グルメツアーなど

北海道立工業技術センター

テクノの中心的研究機関に民間に開放される試験室も



▲地域の工業技術の推進拠点となるセンター

●地域企業の技術高度化のために

北海道立工業技術センターは、「テクノポリス函館」の計画のなかで、地域企業の技術高度化のための事業を進めるうえで重要な役割を担う機関です。

このセンターは、函館圏1市3町がテクノポリス地域に指定されたことに伴い、昨年の10月から工事に着手していました。

市内桔梗町の敷地面積約1万2800平方メートルの中に、鉄筋コンクリート2階一部平屋建ての事務研究棟と、鉄骨平屋建ての試験棟、合わせて約3600平方メートルの規模で、総事業費約17億円をかけて建設され、61年9月完成したものです。

運営は、函館圏を中心とした道内の官民からなる財団法人テクノポリス函館技術振興協会が道の委託を受け行っています。

●技術革新の進展に最新鋭の装置

同センターは、地域の工業技術の高度化を推進する南北海道の技術拠点であることはもとより、北海道の新しい工業の振興を助ける中核的試験研究機関です。

このため、技術革新の進展に即応した高度な技術開発を促進するため、メカトロニクス、新素材、バイオテクノロジーに関する研究開発や工業材料の依頼試験分析、技術指導・技術研修、産・学・官の技術交流などを実施します。

また、各種の試験・研究開発機器や会議室・研修室も整備しているほか、メカトロニクス開放試験室、材料実験開放試験室および微生物化学実験開放試験室は、民間の方も利用することができます。

これらの業務を行うため、同センターには画像処理装置、三次元測定機、精密万能試験機、振動試験機、生物顕微鏡、アミノ酸自動分析計など最新鋭の装置が備え付けられています。

北海道立函館美術館

書や西洋近代彫刻なども展示

●全休的にゆとりのある美術館に

北海道立函館美術館は、市内五稜郭町・旧函商跡地の総合文化センターの中に、鉄筋コンクリート造り平家建て2350平方メートルの規模で建設されました。

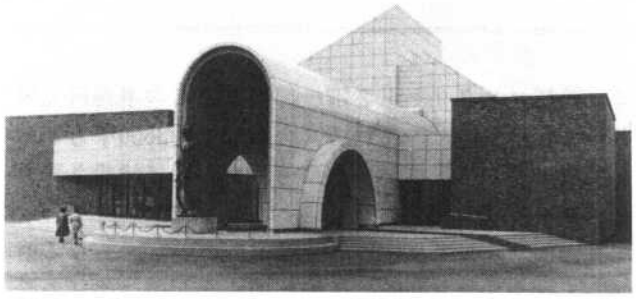
館内は、主展示室、ホール、常設コーナー、講堂などがあるほか、喫茶コーナーや売店も設けられ、全体的にゆとりのある美術館になっています。

●道南の優れた美術作品も展示

主展示室は、約800平方メートルの広さがあり、国内および海外の優れた作品の特別展などが行われます。

高さ9メートルもあるホールには、ルノワール作の「勝利のヴィーナス」、ロダン作の「衣をまとったバルザック」などの西洋近代彫刻が展示されます。

常設コーナーは、田辺三重松画伯をはじめ、横山松三郎画伯、池谷寅一画伯ら道南ゆかりの作家の代表的作品を展示するほか、鷗亭記念室では、著名な書家の作品と東洋美術のコレクションが展示されます。



▲特色多い北海道立函館美術館

また、美術館の正面にはモニュメント(メーン彫刻)としてブールデン作の「自由」が置かれています。

●特色あるコレクションづくりを

この美術館では、函館を中心とした道南地域の各分野の優れた美術作品を中心に、地域の特性にそった特色あるコレクションづくりを目指していきます。また、多彩な展示活動や各種の教育普及活動を通じて、美術についての理解を深めてもらうためのお手伝いもしていくことになっています。

●毎週月曜日は休館日

美術館の利用案内は、次のとおりです。

開館時間＝午前10時～午後5時（入館は午後4時半まで）

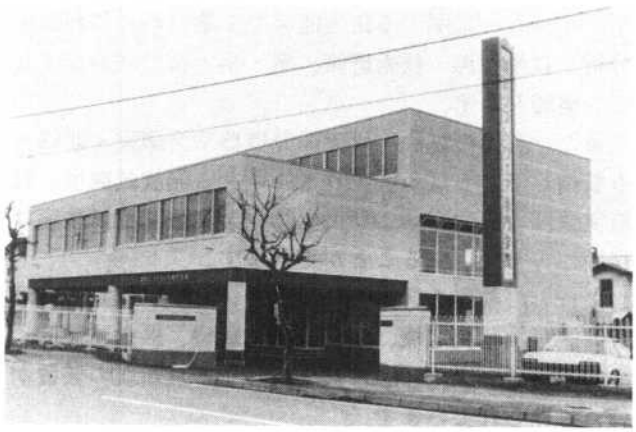
休 館 日＝月曜日、11月23日・2月11日・3月21日の各祝日、11月5日～7日、12月28日～1月6日

観 覧 料＝常設展示は一般100円、高大生60円、小中学生40円（10人以上は団体料金）

◀ルノワールやロダンの彫刻が展示されているホール

函館ソフトウェア専門学院

情報処理技術者養成へ



◀地元の熱い期待を受け完成した函館ソフトウェア専門学院

テクノポリス函館の推進役として期待される道南初の情報処理技術者養成学校、函館ソフトウェア専門学院（学院長・柴田康函館工業高専名誉教授）が函館市田家町8に完成、本年3月18日午前、喜びの完成式が行われた。

学院は、函館市と七飯、上磯、大野の三町、函館商工会議所会員ら地元経済人らが第三セクター方式で設立した株式会社函館情報技術開発センター（社長、川田寛函館商工会議所会頭）の運営。鉄骨造り3階建て延べ1,220平方メートルの校舎に43台の実習用コンピューターを備えており、総工費は約2億円。情報通信科など2年制3学科、1年制1学科で生徒数146人。

母校だより

昭和62年度
卒業生の進路について

函館中部高校
柴　田　隆　一

A・Bより一校ずつ二校受験が可能となった新方式大学入試となり、その結果がどのようにあらわれるか皆目見当つかず心配しておりましたのですが、いざふたをあけて見ると思ったより生徒の出来が良く、統計表にもある様に例年よりも大量の合格者を出し、函中健児の意気を示しました。

特筆すべきことは、北大、道教育大に大量に入学し、弘前大医5名を含み26名、首都圏大学にも国立公立私立を問わず善戦したことである。尚最近の傾向として女子が増加の傾向（本年度1年生男221、女187名）にあるためか、医療技術短大、高等看護学校へ進学するものが増えていることです。

〈卒　業　生　数〉

総　数	20,326名
旧制中学	5,806名
新制高校	14,520名（昭和62年3月）

〈卒業生進路状況〉

卒業生の進路

区　分	進路確定数	合格延数
国立大	115	158
公立大	6	10
国公立短大	4	6
私立大	60	85
私立短大	18	34
文部省所管外	2	2
各種学校	29	30
小　計	234	325
就　職	12	12
合　計	246	337
無業者	166	0

合格者延数

区　分	62年			61年			60年		
	現	過	計	現	過	計	現	過	計
国立大	158	114	272	99	61	160	106	89	195
公立大	10	12	22	14	13	27	9	10	19
国公立短大	6	6	12	10	6	16	13	4	17
私立大	85	139	224	79	110	189	109	122	231
私立短大	34	8	42	28	8	36	29	6	35
文部省所管外	2	1	3	5	4	9	1	6	7
各種学校	30	4	34	9	0	9	25	2	27
計	325	284	609	242	202	446	292	239	531

〈昭和62年大学合格者数〉

国立大学

北海道大	37
道教育大	69
室蘭工大	19
小樽商大	16
帯広畜大	3
旭川医大	3
北見工大	4
弘前大	26
岩手大	8
東北大	9
宮城教大	2
秋田大	1
山形大	3
茨城大	2
図書館情報大	1
筑波大	3
宇都宮大	12
埼玉大	1
千葉大	3
東京大	1
東京外語大	2
東京学芸大	7
東京芸術大	1
東京工大	1
東京農工大	1
電通大	3
一橋大	1
横浜国大	5
新潟大	2
富山大	1
金沢大	6
福井大	1
山梨大	1
信州大	2
静岡大	1
名古屋大	4
京都大	3
大阪大	1
神戸大	1
奈良女大	2
鳥取大	1
岡山大	2
計	272

公立大学

札幌医大	1
高崎経済大	10
都立科技大	2
横浜市大	4
都留文科大	2
静岡県立大	1
大阪市立大	1
大阪府立大	1
計	22

私立大学

札幌学院大	2
札幌大	3
東日本学園大	4
藤女子大	5
北星学園大	11
北海学園大	25
道工業大	5
道薬科大	3
酪農学園大	2
岩手医科大	1
東北福祉大	1
東北薬科大	2
自治医科大	1
千葉工業大	5
中央学院大	1
青山学院大	3
亜細亜大	1
跡見学園女大	1
大妻女子大	1
桜美林大	1
学習院大	2
神田外語大	1
北里大	1
共立女子大	2
慶応義塾大	6
駒沢大	2
実践女子大	1
芝浦工大	4
順天堂大	1
女子栄養大	1
昭和大	1
専修大	4
大東文化大	1
拓殖大	2
多摩美大	1
玉川大	2
中央大	12
東海大	4
東京経済大	3
東京歯科大	1
東京女子大	1
東京女子体育大	1
東京電機大	2
東京農大	1
東京薬科大	1
東京理科大	10
東邦大	1
東洋大	4
日本大	10
日本歯科大	2
日本体育大	1
法政大	6
武蔵大	2
武蔵工大	1
武蔵野女子大	1
明治大	7
明治学院大	4
立教大	1
立正大	2
早稲田大	13
和光大	2
神奈川歯科大	1
相模女子大	1
金沢工業大	1
椙山女学園大	1
名城大	2
同志社大	4
立命館大	10
関西大	1
計	224

編集後記

◆昨年お約束の創刊10周年記念号を漸くお届けすることができました。各期幹事の方々に取材や原稿依頼など色々とご協力をいただいたおかげで、皆さんよりの投稿も例年になく沢山いただき、各地支部からも近況が届きました。記念号にふさわしい盛り沢山の内容になったのではないかと思います。

◆とくに、地元函館では来年の「青函博」をはじめ、話題がいっぱいあり、これまでの沈滞ムードを一気に吹き飛ばそうと大変張り切っておるようです。どうぞ皆さんでお誘い合わせのうえ奮ってご参加ください。

◆ことしの親睦大会は、若い人たちの新しい企画で準備が進められています。どうぞお楽しみに……財源である会費の納入についてもよろしくおねがいします。

発行・白楊ヶ丘同窓会東京支部
編集・伊東克郎、吉田精吾
支部事務局・〒160 東京都新宿区坂町18
小畑文雄方
電話・(351)2012